歎異鈔

松原致遠

歎異鈔

松原致遠

目次

第一章……五
唯一の實在彌陀の本願…宗教一般と本願名號の宗教…「不可思議」の體驗…宗教に於けるすくひ…宗教的要求…宇宙の眞理、客觀的事實…人生非合理の根據…生死苦海の創造…本願力の廻向…全自己全人生の否定と超越…すくひの成就…即得往生…親鸞聖人に於ける時の哲學…攝取不捨の體感…念佛申さんと思ひたつ心…信心第一義…相對善と絶對善…相對惡と絶對惡

第二章……四一
聞法第一の態度…學問と宗教との領域…「たゞ念佛して」…地獄一定の體驗過程…本願念佛の傳統

第三章……五三
道德の善惡、宗教の善惡

第四章……五六

第五章……五六
自利利他の滿足

第六章……五九
「弟子一人ももたず」の宗教的意義…稱ふる念佛と稱へしめらるゝ念佛…稱るが聞くのなり

第七章……六六
無碍自由の念佛生活…諸善の及ばざる所以

第八章……七〇
非行非善

第九章……七一
願生者必然の惱み

第十章……七三
「無義をもて義とす」の意味

第十一章……七三
誓願と名號との關係

第十二章……七五
學問と宗教との關係

第十三章……七六
佛教一般の宿業觀と親鸞聖人の宿業感…本願ぼこり

十四、十五、十六、十七、十八章省略

總結……八三
如來廻向の信…極難の信…純粹なる宗教感情…十方衆生の代表者親鸞…親鸞聖人の現實的精神…善惡の否定と超越…自己及び人生を超えつゝ

第一章

彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をばとぐるなりと信じて念佛まふさんとおもひたつこゝろのおこるときすなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり

唯一の實在彌陀の本願

彌陀の本願。これのみ究竟の實在である。一切のありとおもはるゝものは、たゞ彌陀の本願によりてのみあらしめられてあるものである。すべては本願の內容であり、對象である。

親鸞聖人曰く

難思の弘誓（彌陀の本願）は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり（敎行信證）

この難度海が生死海、すなはち全人生であり、無明の闇が全自己である。これが「あり」とおもはれてゐるものゝすべてである。それらは本願の對象、內容としてのみ實在價値あるものである。

彌陀とは大日、阿閦等に對してあるといふごとき個的の實體ではない、もしそれが實體的のものとして、われ

らの想念に捉へうるものならば、宗教一般に於ていふ神のごときものであつて、偶像、化佛にすぎない。

親鸞聖人曰く

光如來とまふすは阿彌陀佛なり。この如來はすなはち不可思議光佛とまふす。この如來は智慧の相なり。十方微塵世界にみち〳〵たまへりとしるべし（一念多念證文）

と說明し、また

歸命盡十方無碍光如來

とまふし

南無不可思議光如來

と仰ぎ、これを個體として想念に捉へることを避けられたやうである。

それは智慧光としてわれらの內面を照らし、本願としてわれらの內に廻入して吾らを目ざめしめ、名號としてわれらの口業に表現せらるゝものである。聖人また曰く

十方群生海、斯の行信に歸命すれば、攝取してすてたまはず、故に阿彌陀となづけたてまつる。是を他力といふ。（敎行信證行卷）

攝取して（下に言ふ）捨てざる力用、すなはち他力、本願力が阿彌陀佛自爾の表現であるのである。

大無量壽經には法藏菩薩が思惟し修行して本願名號を成就し阿彌陀佛とならせられたことをくわしく說いてある。聖人曰く

法性法身とまふすは、いろもなしかたちもましまさず。しかればこゝろもおよばず、ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらはして、方便法身とまふす。その御すがたに法藏比丘となのりたまひて、不可思議の四十八願をおこしたまふなり。（唯信鈔文意）

この一如寶海よりかたちをあらはして、法藏菩薩となのりたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿彌陀佛となりたまふがゆゑに、報身如來とまふすなり。（一念多念證文）

一如、一如寶海といふは哲學的にいふ絕對無限ではない。それは一如平等の世界である。この現實人生を我執による差別動亂の世界と感ずる、その感情に先驗的に感見せらるゝ彼岸の實在である。それが吾らの迷ひ業煩惱を見るに堪えずして、それらをして、それを超えて平等一如の世界に生れしめんがために、かたちをあらはし、すなはち人格的活動を起したのが法藏菩薩である。

この菩薩、われらに代りて願を發し行を修して、本願と名號とを成就し、われらが往生成佛の本懷、一切衆生の志願は滿足せらるゝことゝなつたのである。

この本願名號を體驗することによりて全人生、全自己は根本的にすくはるゝ。この本願名號こそ宗教の本質で

ある。眞實の宗教といはれ、第一義的宗教といはるゝものは、この本願名號の宗教でなければならない。この本願名號の體驗に於て歸命の對象として彼方に仰ぐ人格的實在こそ不可思議光如來である。この體驗なくしてえがく阿彌陀佛は偶像である。

宗教一般と本願名號の宗教

宗教一般に於ては、この本願名號をもたぬ宗教に於ては、神と人、佛と衆生と對立することになつてゐる。すなはち神の愛、佛の慈悲により、いのるもの、信仰するものがすくはるゝとするのである。かゝる神佛は形而上學的のものであり、カントによつてすでに亡ぼされたるものである。

それはかくのごとく救濟者と被救濟者と對立するかぎり、永劫の平行線であつて接點はない。故にすくひにはいのり、信仰といふ條件がなければならない。

しかるにその信仰は人間の創り出せるものである。人間の創り出せるかぎりは、かならず不純のものである。要求がある。そこにはすくひを要求する意識がある。この要求によりてなせるもろ〳〵の行爲ははからひである。もとより救ふものと救はるゝものとはある。佛と衆生とはある。もし完全なるすくひを望むならば、佛より衆生へ、救濟者より被救濟者へはたらきかけねばならない。そこに對立が破れて一となる世界が開けるのである。

こゝに本願名號の廻向といふ、唯一眞實の宗教淨土眞宗がなければならない事理の必然がある。

今を去る七百年、近代的要求を以て、この形而上學的の佛を否定し、淨土教徒がやゝもすれば、偶像崇拜に陷るより免れ、功利主義に墮しやすきよりすくはれ、本願名號といふ純粹宗教を體驗せる親鸞聖人は仰ぐべき限りである。

不可思議の體驗

「彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて」。この際不思議は普通ならば誓願の形容詞である筈であるが、今は然らず。誓願が不思議であり、不思議が誓願である。同一主格である。

本來宗教とは不可思議の體驗であるといつて差支はない。富士川游博士が「宗教的體驗といふものは、個人の人々の精神と、ある特殊の對象との生命的結合の體驗であると說明しても、ある特殊といはるゝものは、我々の意識に上るものではない。我々はたゞそれを不可思議と感ずるのみで、不可思議と感ずるといふことは全く自我の態度に外ならぬのである。」といはれ、また「宗教的體驗が眞實に出來た場合には、不可思議はたゞ不可思議と信じて、何等のはからひをせぬのであるから、佛を信ずるといふことも畢竟、佛を信ぜしめられるのであると感ぜられるのである。」といはれたのは、古來漠然と、或は分りもせぬのに分つたやうに談ぜられてゐた宗教體驗を、

判然と明白に説明せられて尊い。

親鸞聖人の和讃には、不可思議といふことばが三十三個所もある。これは淨土教の先蹤にも例のないことである。こゝにも親鸞聖人の近代的精神を明瞭に看取することができる。近代とは常に現實的にして、永遠に新生命あるをいふ。

思議とは思は意志である、議は意識であらう。意志、意識は、ともにはからひである。はからひは我執のはたらきである。宗教とはその我執の否定である。

不可ははからひを容れぬものであると同時に、はからひを否定するの謂である。

本願とは吾らのはからひの手にとらへられぬものである。不意識に吾らの内面に廻入し來るものである。

さうして吾らのはからひを否定するものである。

佛教の無我の原理が宗教化されて、無義を以て義とするにいたつたのである。法然上人がしば〳〵これを語り、親鸞聖人が「念佛には無義をもて義とす」を持言とせられたのは當然であり、無我の原理の自然の開展であり、同時に本願の歴史的展開である。

佛教の無我の原理は本來自らの力を以て我執をほろぼすのであるが、我執そのものである吾らに於てはその徹底實現は不可能である。これが宗教的となり、本願を信じ、念佛を申し、その願力自然のはからひにまかせきつたとき、その大いなるはからひの中にあるを自覺することによりて、自然に、知らず〳〵自らのはからひは消え失せて、我執の根源は亡ぼされるのである。

故に不思議が本願であり、本願が不思議である。

宗教に於けるすくひ

しからば「その誓願不思議にたすけらるゝ」とは如何。それはいかなる精神的現象であるか。これ本願の宗教の最初にして最終なる大問題である。それが一人の自分がすくはるゝのではなく、全人生的に、一切衆生とともに、永遠にすくはるゝ道なるがゆゑに、これは實に大問題である。またこれが、この鈔全體を貫く問體であり、生命である。長きを厭はず詳記することを許したまへ。

宗教一般に於ては人間が神を信仰し、衆生が佛の慈悲を信ずるのである。それは前にいふごとく宗教としては第二義的である。宗全なるすくひは成り立たない。

眞實の宗教淨土眞宗に於ては

信は願より生ずれば　念佛成佛自然なり

自然はすなはち淨土なり　證大涅槃うたがはす

信は願の體驗より生ずるのである。願の體驗が信である。

本願力にあひぬれば　むなしくすぐるひとぞなき
功德の寶海みちみちて　煩惱の濁水へだてなし

その本願には今遇ふのである。この體驗が淨土眞宗である。宗教一般の止揚のあとにあらはるゝものである。

本願力にあふ。これが彌陀の誓願不思議にたすけらるゝことである。

誓願、本願力といへば、一の物理的なる力を想念するが、さういふ實體のあるものではなく、「難思の弘誓は難度海を度するの大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり」の、この「度する」といふ體驗そのものが本願の現はれである。風が吹くことの外にないごとく、攝取不捨の外に阿彌陀なきごとく、難度海を度することが本願することである。

あふといふ體驗が、本願そのものゝ實現である。しからば、いかにしてこれにあふか。

宗教的要求

私はその序に、こゝに「たすけ」「すくふ」といふことばについて、十分の檢討をなす必要を感ずる。すでにそれが親鸞に於て、「あふ」といふ具體的なことばによつて表現されてゐるごとく、淨土眞宗に於ていふすくひは、普通宗教に於ていふものとは、體驗內容は違ふのである。今日は一般にこれが混同され、祖師の體驗は甚しく誤解されてゐるやうであるから、ことにその必要を感ずるのである。

一般に宗教に於ては「すくひ」（たすけと同意とす）をいふ。しかしこのすくひといふことばほど曖昧なものはない。それは元來抽象語である。極度に具體的現實的傾向をもつた親鸞聖人に、すくひといふことばのないのは注意すべきことである。

すくひも、たすけも聖人自筆の著書にはなくて、第二者（セコンド・ハンド）の手に成る此鈔から始まつてゐることも、殊に深く注意すべきことである。故にこのすくひが親鸞聖人の、いづれの體驗的表現にあたるかは十分に吟味しなければならない。然らざれば甚しく祖意を誤まるであらう。

元來具體的にいへば貧に金をえたときすくはれたといひ、空腹に食をえたとき、病氣の癒えたとき等に、すくはれたといふ。然れば何らかの要求の滿されたときにすくはれたといふのである。さすればその要求如何によては極めて功利主義なる、不純なるものもあり、また純なるものもあらう。普通宗教に於ていふそれは、やゝもすればその不純なるものに屬しはしないか。

キリスト教の天國に福祉思想のあることはイエスのことばによつて明かである。もし神の愛によつて天國にゆき「さひはひ」を得ることをすくひといふならば、それは不純を免れない。また淨土教に於て、佛の慈悲によつ

て淨土へ生れて人間の想念するやうな安樂を得るをのみすくひといふならば、不純を免れない。親鸞聖人が觀經の淨土を化土とせられたのは此間に深い省察あつての當然の批判であらう。惟ふに化土は不純なる欲望の對象であり、願（純化されたる欲望）の對象でないからではあるまいか。宗教的のそれとは次元がちがふのであらう。

宗教的のすくひは至純至高至深の要求を滿たす意味のものでなければならない。一切人類の至深至奥の要求（一切衆生の志願）をみたすものでなければならない。この要求そのものを明かにせずして、みだりにすくひは談じられない。

しからば一切人類の根本的要求とは何か。私は結論から語る、それは精神の絶對的自由、無上涅槃にいたることであると。

宇宙の眞理、客觀的事實

一切人類といふ以上、その要求、卽ち理想はかならず普遍妥當のものであり、宇宙の眞理、客觀的事實に根據を置くものでなければならない。

この客觀的事實を道破したものは釋尊一人である。西洋の哲學がカント出で、辨證法出で、現象學あらはれ、人生を合理化せんとし、又再び生の哲學が唱へられて人生を非合理なりとするニイチエ、ショッペンハウエルに還るごときは、この客觀的事實に目さめないからではないか。

客觀的事實とは相關緣起である。宇宙人生はすべてつながり合ふてゐる一つの生命であるといふのである。外的に見ればバラ〳〵の存在のやうであるが、內的事實は生命互ひに交流し相關してゐる具體的一如の世界であるといふのである。私はこれを三個の事理由によつて說明しようと思ふ。

まづ吾らの生の由來を考へる。吾らに父母があり祖父母があり、曾祖父母があり、かくて何千年の昔にさかのぼれば、どれほどの父母があるとも知れない。この無數の父母によつて無數の同胞が生れてゐるとすれば、一切の衆生はみな生々世々の親子兄弟であり、それらの血は流れあふてゐるのである。かくて自他一如は事實である。

また吾らの生そのものを分析して見れば、全部他者の集りである。吾らは食餌なしには生きられず、それはすべて他者の生命である。他の生命を攝つて我となしつゝあるのである。この意味に於ても自他一如は事實である。

更に進んで吾らの生の內容、卽ち自我內容を見れば、こと〴〵く他者の集積であつて、自我とはそれを感受し統一してゐるものにすぎない。（拙著『人生要求としての宗教』參照）

幼にしては母、乳、玩具が自我內容であり、長じては妻子、家族、交友がそれであり、仔細にその刹那々々の自己內容を檢すれば、こと〴〵く他者である。自己の顏、被服、意識等も自己の內容となつて居るが、それはすでに客觀されたるものであつて他者である。

何をおさへて自己といふか。この問に對して一應の答となるものはデカルトの「我思ふ故に我あり」であらう。しかし事實は思ふといふ作用、業以外に我はないのである。燃ゆるほかに火のなきごとくである。「業あつて業生なし」の釋尊の道破こそ千古の眞理である。

吾らは常に何かを見、思ふてゐる。しかし見、思ふといふ時は「何か」といふ對象を思ふて居るやうであるが、實はその對象が我の内に入り來て、我となつて居る事實を思ふといふのである。

何をおさへて我といふか。實はこの見られ思はれてゐる對象の群が我である。すなはち自己とは一切の他者、山河大地、一切衆生である。かるが故に自己といふものは、事實に於ては「我」とおもはれてゐるものにすぎない。明かに言へば、その「我」なるものは山河大地、一切衆生を感受し、これを統一してゐる器にすぎない。

かくて、どこまでが自己であつて、どこまでが他己であるかといふことは具體的事實に於ては分るものではない。かくて自他一如は人生宇宙の客觀的事實である。

もし最高普遍の理想なるものが客觀的事實の上に立てらるゝものならば、自他一如、一如平等こそそれであらねばならない。その完全なる實現が無上涅槃である。（現に己を忘れて多數に盡した人を神として仰ぎ、無我に近い人を聖者として尊み、利己主義を醜しとして忌むにても知らるゝことである）

たゞそこに何故にその實現が精神の絶對的自由であるかの問題がのこる。

人生非合理の根據

自他一如はかくのごとく吾らに不意識的には實行されつゝあつて、何故に意識的には實踐されないのであるか。吾らの意識は明かに自他を對立せしめて、我見を貫き、我欲を滿足し、我愛を遂げんとするのは何故であるか。人生が非合理といはれ、ライプニツツが人間を兩棲動物といふごときはこゝに根源を置くのである。この大問題を解決せずしては、人生は永劫に謎である。

この非合理、矛盾の根柢をなしつゝあるものを發見したのも釋尊である。

釋尊によればそれが無明である。我執である。後に世親菩薩によつて末那と名けられたるものがそれである。それは吾らによつて意識せられざる意識、この肉體的自我を一切他者と切り離して我なりとする意識がある。西洋の心理學にはそれがない。

嬰兒がほかの子供の母の乳を吸はんとするを拒むのがすでにそれである。肉體のあるかぎり、晝夜不斷、この我執、根本無明は動いて止まないのである。

この我執が我見、我欲、我愛等を生じて一切他者を自己の狀態に、自己の可能態に置かんとする。これを法執といふ。かくてあるがまゝの山河大地、一切衆生を、そのまゝ感受することをせず、すべて我執によつて雜染し、

好悪、愛憎、是非利害等の價値づけをする。またこの他物に對して働きかけるときも、その身口意の三業は我執によつて薫染せられてゐる。

それらの自己本位の意識感情の起る端的、根本識はこれを感受し集藏する。それらはすでに我執に薫染せられてあるゆゑに、業となつて殘り、永劫消ゆることなく、これが發動して未來の自己をつくり、運命をつくる。

故に心眼を開いて人生及び自己のすがたを見れば、人生は業のあらはれであり、卽ち末那によつて薫染せられたる異熟現象であり、自己は業の集積である。

業と業と相打つて煩惱をおこし、煩惱がまた業をつくり、業をかさねて自繩自縛し、永劫流轉するのである。

かくて人生と自己とは、おの〳〵自ら知らざれども、これを擧げて業の繫縛であり、生死の苦海である。精神の絶對的自由を失へる靈の牢獄である。

蠶の自ら吐ける糸によつて自らを縛り、自らを熱湯に煮らるゝごとく、我執が業をつくり、業が煩惱を生み、自らを惡道に追ひ、流轉輪廻のきはなしといふは、動かすべからざる實感である。キリスト教に原罪といふがこの我執にあたるであらうか。

生死苦海の創造

人生とは何ぞやといふこの根本的にして難解なる問題に對して、釋尊は「人生は苦なり」と斷じ、その苦の根源を無明、卽ち我執と見られた。これは萬人の認めざるを得ざる事實である、而してこの我執を滅ぼす法として四諦十二因緣は說かれ、爾後の佛敎と稱せらるゝもの、こと〴〵く我執より解脫する法の實踐にほかならぬ。故に吾らのすべてが有つこの我執の滅、業縛からの解放が精神の絶對的自由である。

釋尊は肉體をもちつゝ、この人生のたゞ中に於て全く我執の滅びつくした境地、無上涅槃に達せられた。五十年の說法はこれを說き、その行動はこと〴〵くこれを示された。何ものにも囚はれぬ絶對の精神的自由の境地を身を以て示された。「三界はこれわが物なり十方の衆生はこと〴〵くわが子なり」を實踐を以て示された。（拙著『人生要求としての宗敎』に詳說）キリスト敎に於ては、古來一人も神の境地に到つたものがないから、神の屬性はイエス、ポウロ、オウガスチン皆さま〴〵であるが、吾らは幸にこの地上に佛格を成就せる世尊をもつて居り、その自覺內容は平等一如、人類の最高理想であることが明かに知らるゝのである。

然るに釋尊當時の幾千の追隨者も、この大覺に達せず、聲聞緣覺にして終り、後に龍樹、天親等の幾多の精神的偉器は出現せられたが、皆この精神の絶對的自由の境地に到らんとして倒れた。

一切菩薩ののたまはく　　われら因地にありしとき
無量劫をへめぐりて　　萬善諸行を修せしかど

恩愛はなはだたちがたく　生死はなはだつきがたし
念佛三昧行じてぞ　罪障を滅し度脫せし

恩愛のきづな、我執の繫縛はほごしつくしえず、遂に彌陀の本願を信じ念佛をまふして彼土に往生してこれを證得するよりほかにいたしかたなきを、自ら身を以て證明せられた。

されば釋尊の大覺示現もまた　五濁の凡愚をあはれみて
久遠實成阿彌陀佛　迦耶城には應現する
釋迦牟尼佛としめしてぞ

ものに外ならず、彌陀の本願海中よりあらはれて彌陀の本願を說かんがためであつた。換言すれば釋尊は一切衆生の究竟理想は一如平等にあることを、法（無我の原理）を說いて示し、この境地を身證し體現し、而してその完全なる實現成就は彌陀の本願によるのほかなきを示されたのである。大聖釋尊出世の祕懷は「たゞ彌陀の本願海を說かれん」がためであつた。

本願力の廻向

一如の覺體彌陀は吾らが生死の苦海に流轉せるを見るに堪えず、これを一如平等の世界に往生せしめんために本願を建てた。その本願の表現は南無阿彌陀佛である。

この本願が吾らの內面に身證されて信心となり、口業にあらはれて念佛となる。そこにすくひは成就するのである。

本願を信ずることが本願力に乘ずることであり、本願にあふことである。その具體的事實、宗教經驗としては、善導大師の「衆生貪瞋煩惱の中に、よく淸淨の願往生心を生ずる」が最もよくその內的光景を表現してゐる。

吾らの我執は貪慾、瞋恚となつてそれ自身をあらはす。この貪瞋煩惱なるものが全自己である。しかし吾らは智慧の盲なるが故に（自らを知らざる智慧の盲）貪慾（どんよく）をも瞋恚をも當然の事として肯定してゐる。親殺しの勝造が不逞の親を殺すは當然であるとした如くである。しかるに一切の生きとし生けるものに孝道を知らしめ孝といふ眞實道に生きしめようとした願心の結晶孝經の講義をきくこと三年にして勝造は首をさし出して、この極重惡人を殺したまはれといふ。願心が新しき自己となつたのである。そこに自我の本質價値に對する根本的の目ざめがある。

貪瞋そのものとなつて人生を渡りつゝあるもの、緣あつて法（願心の表現）をきくことによつて、忽然として自らの內面に貪瞋の二河を見出す。さうして貪瞋煩惱の唯中より、それ自身を悲しむ（否定する）心を生ずる。

これが清淨の願往生心であり、親鸞によれば、それが本願である。（文類聚鈔參考）

今までは煩惱を煩惱と知らず、罪惡を罪惡と知らなかつたものが、自らを煩惱具足、罪業深重と見る立場に立たしめられるのである。次元がかはるのである。今まで肯定してゐたものが否定さるゝのである。今までわれ善しとしたものさへ惡と見さしめらるゝのである。その否定態、新主觀が本願大悲である。

全自己全人生の否定と超越

吾らは平生でも個々の人生經驗に於て自らの惡を意識する。それが個々の惡であるかぎり、それは人生の中での事實である。

その惡を意識するは善を求むる心である。しかしその善なるものは、いかに求めても明日の朝の永劫に來らざるが如く實現せざるものである。實現せざるものを何故に求めるか。不實在のものは求めらるべき可能性がない。それはあるにきまつたものではあるが、地上に實現せざるかぎり彼岸のものである。善の善なるもの、究竟善、絶對善は一如平等である。

それが彼岸のものであるとする意識、これはもはや個々の意識ではなく意識一般、無限反省の主體である。吾らに絶對善なしと見る反省主體は、個々の惡の底に、惡の惡、絶對惡を見てゐる。この無限反省の主體こそ彌陀の本願であり、絶對惡こそ罪業深重、煩惱熾盛の衆生である。一切群生海である。これが具體的なる宗教經驗となるとき

悲しいかな愚禿釋の鸞、愛慾の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近づくことを快しまず。耻づべし、傷むべし。（教行信證信卷）

の表現となる。

かく吾らが自らの惡を泣くのは、私が泣くのではなく、彌陀が我に於て泣くのである。泣かしめらるゝのである。泣かしめらるゝことに於て、自然に不意識に淸めらるゝのである。

この自らを諦觀する智慧、この業を怖れ、罪を泣く純粹感情、しかしてその惡の發見による無限の精進、高き價値意識は、本願力の發揮であり、同時に一如への接近である。

今までは便宜のために、吾らとか、私とか記して來たが、事實として、吾らも私もなくて、實にあるものは煩惱具足の凡夫ばかりである。それはつねに本願されてゐるものであり、本願の對象であり、また內容である。究竟するところ、實在するものは煩惱と本願、無邊の生死海と、これを光明攝取する無限大悲とがあるばかりである。

現實人生、人間が、「煩惱具足の凡夫よ」と呼ぶ本願に喚び醒されて、煩惱具足の凡夫となる。この呼び聲が煩

惱具足の自覺である。人間が自覺し得べきかぎりの自覺である。眞に自らと、人生との本質に、價値に目ざめるのである。その目ざめの大主觀が彌陀の本願なるがゆゑに。

すくひの成就

親鸞聖人曰く

煩惱具足と信知して　本願力に乘ずれば
すなはち穢身すてはてゝ　法性常樂證せしむ

この煩惱具足の自覺のほかに本願力に乘ずるといふことはない。自覺たゞちに乘本願力である。

かくのごとく本願は吾らに迫り、吾らに入りて、吾らを目ざめしめ、すくふと同時に、遠く高く吾らを超えて、吾らを呼び、吾らを招きたまふ。また吾らの內に信心を生み、その信心の對象ともなる。實に絕對自由なる純粹意志である。

かくのごとく本願とは法性常樂のみやと、一如平等の世界、眞實報土と、この穢身穢土とをつねに往還し去來して止まぬ動的生命である。

この本願をかくのごとく體驗するが「本願力にあふ」ことであり、「彌陀の誓願不思議にたすけ」らるゝことである。この體驗の心理的のうごき、全情意の感動が「念佛まふさんとおもひたつこゝろ」であり、その表現が稱名念佛である。

しかしてまたかの本願の體驗も本願そのものゝ活現であり、この念佛まふさんとおもひたつこゝろも、本願力の廻向、すなはち佛智よりたまはらせたまふ信心であることを忘れてはならない。（念佛と念佛まふさんとおもひたつこゝろについては下に言ふ）

この體驗の內容が卽得往生であり攝取不捨である。

卽得往生

往生は往き生るゝといふ文字である。往くは多く空間的の行くと誤まられ易い。行くは肉體がゆくのであり、物理的現象である。かういふお淨土まゐりを、すくいといふならば、それは外的のすくひである。宗敎は心の問題である。親鸞聖人が「無義をもて義とす、このこゝろ往生す」といはれしごとく心が往くのである。

往は捨此往彼である。こゝを捨てゝ、かしこにゆくのである。此は現實人生であり、彼は彼岸、無量光明土、眞實報土である。

捨てるとは否定することである。

生死海を度しつくさずんば止まざる如來の願心がひゞいて來るとき、內面に廻向せらるゝとき（それは彼岸よりの招喚であるから）自ら現實人生と自己との價値は全的に否定せらるゝ。

價値意識の高い人（高き理想の持主）ほど現實人生の相を悲しむ。悲しむは價値否定の情意に於けるあらはれである。古來の聖者は皆現實を悲しんでゐる。聖德太子は世間虛假、唯佛是眞といひ、セント・パウロは「この世に屬けるものはみな空し」といひ、釋尊は人生は苦なり斷じたまふた。

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはします。

と自己及び人生を全的に否定するとき、すでに彼に往いて居るのである。この意味に於て捨此と往彼は同時である。價値の轉換であり、心のむき、態度の轉向である。これは本願によりてなさしめらるゝ全自己全人生の止揚である。

具體的にいへば、現實人生を火宅無常の世界、五濁惡世と見るのは、眞實報土の光である。このとき全自己は、彼の土に向はしめられてゐるのである。

こゝにことわつて置くことは吾等の意識に樂しみの國、謂ゆる結構なところとして描く安樂國は、凡情をもつて染められたるものである。眞實報土は高き價値意識の對象であり、或は淵源である。

故に親鸞聖人の往生は、聖人以前の往生とは意味が深められてゐる。聖人も淨土教徒である以上、願生彼國は究竟の志願であり、ことにこの人は稀に見る熾烈な證大涅槃の願求者であつた。

親鸞聖人がその爾前の往生の意義を何故に現實的に深められたかに付て、その理由事由とすべきものは頗る多い。今は遺憾ながらこれを略する。

まづその聖人の往生觀に聞かう。

卽得往生といふは、卽はすなはちといふ。ときをへず、日をもへだてぬなり。また卽はつくといふ。そのくらゐにさだまりつくといふことばなり。得はうべきことをえたりといふ。眞實信心をうれば、すなはち無碍光佛の御こゝろのうちに攝取してすてたまはざるなり。攝はおさめたまふ、取はむかへとるとまうすなり。おさめとりたまふとき、すなはちとき日をもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうるとはのたまへるなり。（一念多念證文）

臨終のときにあらず、かねて尋常のときより、つねに攝護してすてたまはざれば、攝得往生とまうすなり

（尊號眞像銘文）

いかなる人も一應はこの卽得往生の釋の、破天荒なるにおどろかざるはあるまい。しかも靜かにこれらのことばの底を流るゝ祖師の寸毫も自ら欺けない人生體感が窺はるゝことである。祖師は明かにその念佛まうさんとお

もひたつこゝろの中に、攝取不捨と卽得往生とを感得し、その刹那に永遠の生命を獲得せられたにちがひない。祖師はあくまでも具體的であり現實的であらんとする內面の切實要求に忠實であつた。

宗敎人にして深い哲學をもつことに於てセント・アウガスチンと東西相列ぶともいふべきこの偉大なる哲學者親鸞は、「時」を哲學したところの哲學界の巨人である。まことに時を哲學した哲學者は稀である。

前念命終、後念卽生は、常識的に解すれば前念に此世の命をはつて、後念に淨土に生るゝことであるが、親鸞聖人は愚禿鈔に於て「本願を信受するは前念命終なり。卽ち正定聚の數に入る。卽得往生は後念卽生なり。卽時に必定に入る。また必定の菩薩と名くるなり。他力金剛心なりと知るべし」と轉釋せられた。前の意味は前念に命終りて後念に卽ち淨土に生ると、前後に空間的時間があり、平面的であるが、祖師のは時間觀念は亡び、全然立體的である。それは他力金剛心を分析したものであり、その內的光景である。個的自我を主體とせるものから本願名號の統一に入り、凡俗生活から念佛行者となるのである。生の意義の轉換であつた。さうしてそれこそ實に最も重大なるものであつた。

親鸞聖人に於ける時の哲學

淨土眞宗の僧俗ともに輕々しく未來をいふ。元より證大涅槃は死の彼方にのみあり得る。しかし多くの人たちの談ずる未來は、空間的時間の未來である。現實と切りはなしたるものであり、或はむしろ現實とは因果關係、つながりの乏しきものである。

そも〳〵過去は現在意識の反省內容としてのみあるものである。未來はまた現在過去の反省に於て豫想豫感せらるゝものである。

時間を哲學したものにベルグソンがある。彼は純粹持續の思想によつて空間的時間觀念より免れた點に大いなる功績を殘した。然し時間に拘束せられぬ永遠を今に生きたものは、皆深い宗敎人であつた。その代表的一人としてルイスブレークは「神の出現は時間なき永遠の今である」と言つた。眞實の生とは親鸞の思惟せるごとく永遠の今の相續である。時間的無限は數的無限であつて、生命的の無限でなく、むしろ有限である。

おもふに往生を時間的に今と切りはなして考へるといふことは、この大哲學者、深刻なる宗敎人の現實的精神がゆるさなかつたのであらう。また今の攝取不捨の實感內容としての卽得往生が、あまりにも明かであつて、それに滿足し歡喜し感謝せられたからであつたのではなからうか。

入正定聚は願文の當面に於ては明かに彼土であるが、それを現實とするのも體驗身證のいたすところである。深き體驗に於て、願文の眞精神を聞いたのであらう。

今こゝに永遠を感得する以上、必至滅度、證大涅槃を明かに豫想豫感する以上（全人的自證としての豫想豫感

以上の實在はない）その外に空間的時間の未來の往生を期待する必要はない。期待には不純があり、不安がある。來迎思想が純粹に宗教的ならざる所以がこゝにある。

すでにそこに永遠の生は感得せられた。肉體の死はもはや問題ではない。ゆゑに親鸞聖人のいかなる述作にも、未來、死後、死といふことばは見られない。死とは、この宗教人には、生の意義の轉換にすぎない。「念佛の行者は横超の金剛心を窮むるがゆゑに、臨終一念の夕、大般涅槃を超證」するのである。

また證大涅槃とは云つても、それは價値に於て遠く高きものではあつても、空間的に然るものではない。それは現實を照らす光として、常に生の前景に、もしくは背後に輝くものである。

宗教とは、所詮理想の光が現實を來り照らして現實を超えしめ、理想界に赴かしむるものである。ゆゑに理想を彼方に立てるのではない。描いた理想は假想である。理想は必ず現實を照らす光であり、否定智である。招喚の聲である。

この常に照らされて、自ら知らずして理想光明の世界に向はしめらるるが、常に往生しゆくすがたである。

これを生の具體的事實について云へば、爾前に於ては我執を以て自己創造の統一態としたのを、本願名號を以てその統一態とするのが、往生しゆくすがたである。往相、すなはち往生しゆく相は、本願を信じ念佛しつゝある相である。

この實感の表現が

大悲の願船に乘じて光明の廣海に浮びぬれば、至德の風靜かにして衆禍の波轉ず。（教行信證）

ともなり、自然そこには

能く一念喜愛の心を發すれば、煩惱を斷ぜずして涅槃を得。（正信念佛偈）

の身證ともなるのである。

教行信證信卷に記されたる現生十種の益こそ、この往生人の生活態度であらう。

しかし私は來世の往生を否定するものではない。まことに眞實に生死の苦海を超え了るのは彼岸に於てのみありうることである。娑婆永劫の苦をすてゝ、淨土無爲を期することこそ、一切人類の根本志願であり、願心莊嚴の淨土こそ、願はしきかぎりである。今生に於て永遠の御親のふところを思慕し、たましひの故郷をもつことに於てのみ、そこへの旅路をおもふことに於てのみ、人生の生き甲斐を感ずるものである。

たゞ未來偏重者のごとく往生は來世にのみありとするは、彼岸此岸を切り離すところには、純粹の宗教的要求の滿足はあるまいと思ふ。祖師は本願名號の體驗をすくひとし、未來偏重者は彼土にゆくことをのみすくひとする。そこに根本的の相違のあることを深く反省せねばならない。すでに本願海中に攝取せらるれば、永遠不死の生は感得せられてあるのである。體驗の世界に於ては、必至滅度は、今「かならず」と實感せらるゝのであり、

未來のみを期待するは來迎思想であらう。

攝取不捨の體感

攝取不捨と卽得往生とは、前の往生のくだりに引いた一多證文、銘文の文にあるごとく、「念佛まふさんとおもひたつこゝろ」の體驗の二面である。

卽時往生は前にのべたる如く往生人の體驗であるが、攝取には歸依の對象を仰ぐ。

所詮攝取不捨とは絕對の智光を仰ぐ宗教感情である。念々の煩惱を照し出されて、逃ぐるにところなく、たゞ念佛するよりほかなき自らに、悲喜の感情交流するところにあらはるゝ宗教感情である。

凡そ親鸞聖人ほどに光明攝取、攝取不捨をよろこんだ人は稀であらう。吾らの說明を加へんよりは、この眞實往生人の表白に聞くべきである。

照は無碍の光明信心の人をつねにてらしたまふとなり。つねにてらすといふは、つねにまもりたまふとなり。我身とはわがみを、大慈大悲心ものうきことなく、つねにまもりたまふとおもへとなり。攝取不捨のこゝろをあらはしたまふ。（尊號眞像銘文）

攝護不捨とまうすは、攝はおさめるといふ。護はところをへだてず、ときをわかず、ひとをきらはず、信心ある人をば、ひまなくまもりたまふとなり。まもるといふは、異學異見のともがらにやぶられず、別解別行のものにさえられず、天魔波旬におかされず、惡鬼惡神なやますことなしとなり。不捨といふは信心のひとを、智慧光佛の御こゝろにおさめまもりて、心光のうちにときとしてすてたまはずと、しらしめんとまふす御のりなり。（一念多念證文）

この別解別行の左訓に「念佛を申しながら自力のこゝろあるものなり」とあるに見ても知らるゝごとく、これらの障りは皆內面的のものであることを忘れてはならない。さうしてこれらの文字一一、血の出るごとき體驗の結晶である。仰ぐべし、尊むべし。ことに左のことばに到りては宗教感情の高さ、到底吾ら幾百年の聞法ののちにも到りうべき境地ではない。

攝取心光常照護といふは、無碍光佛の心光つねにてらしまもりたまふゆゑに、無明の暗はれ、生死のながき夜、すでにあかつきになりぬとしるべし。（尊號眞像銘文）

念佛申さんと思ひたつ心

上來のべ來つた「彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて」も「卽得往生」も「攝取不捨」も、みなこれ「念佛まうさんとおもひたつこゝろ」の信一念の內的光景である。念佛まうさんとおもひたつこゝろは、自力すなは

ちわがはからひの盡きたときに起るこゝろである。わがはからひの盡きたところに起るこゝろであるから、それはすでにわがこゝろではない。如來のこゝろが吾らの心の上にあらはれたものである。

はからふも本願の御もよほしであり、はからひの止むのも果遂の願のはたらきである。永劫すくはれぬといふ自覺の唯なかに、永劫すくはれぬものを「われをたのめ」と呼ぶ南無阿彌陀佛があらはれて、われを呼ぶのである。

その經驗の事實に於ては、「もはや佛の御名をよぶより仕方なし」といふこゝろとなつて稱名念佛するのである。佛の御名をよぶより仕方なしといふ心の中にあらはるゝ佛の御名なるものこそ、吾らがために選擇せられたる本願の行、南無阿彌陀佛である。その南無阿彌陀佛をえらぶこゝろも如來よりたまはる信心の智慧である。それはすでに凡夫のこゝろと次元をことにせるものである。

これが廻向の行信である。

若は行、若は信、一事として阿彌陀如來の淸淨願心の廻向成就したまふところに非ることあることなし。

（敎行信證信卷）

ともに廻向のものではあるが、名號必ずしも信心を具せず、眞實信心は必ず名號を具するが故に、この念佛まうさんとおもひたつこゝろこそ「本願の廻向の信心」、眞實信心といはるゝものであつて、眞實報土の正因である。

○彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれずただ信心を要とすとしるべし

信心第一義

老少は必ずしも年齡の問題ばかりではない。これは佛道修行、もしくは聞法念佛、すなはち宗敎經驗の淺深をも意味する。善惡といへども下にいふごとく、人天のなすところの善は虛假雜毒の善である。道德といへども、無上涅槃に照せば相對的價値にすぎない。

これらはみな相對的である。絕對平等の立場よりすれば、迷ひといふ「一」に歸する。而して皆これ本願の內容であり、對象である。「えらばれず」といふは、老少善惡といふごとき差別觀念を否定するのである。

「信心を要とす」とは、すくはるゝには信仰を必要とすといふごとき、第二義的宗敎にいふ條件的の意味ではない。宗敎一般にいふ信仰、信念といふがごときは、人間所生のものである。

信は願より生ずれば　念佛成佛自然なり

彌陀の本願は、老少善惡のものをえらばずすくふべく、それらの內面に信心を生ましめるものである。この信心の生るゝのも本願の實現である。

「要とす」とはこの信心こそ唯一の生命である、第一義諦であるといふことである。

○本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆゑに。

相對善と絶對善

この一節について最も重大な問題は、多くの人が、これを以て善を否定するものとなすことである。それは道德と宗教との關係について深い考察ももたず、さういふ人自身、道德意識が缺如して居るのである。高い道德意識と、道德的なる深き自己反省なきところに、宗教性は絶對に生れない。

「他の善も要にあらず」は善の否定ではない。善は善なるがゆゑに、どこまでも善である。

これは、この他の善も要にあらず、といふは、善を求め求めして行つて、またあらゆる善をなしつくして、遂にわれ善をなす能はずといふ自己絶望に達したときの、叫びである。

人間が善惡を分ち、また惡を忌むは、元より善をなさんとする意志希望をもつからである。しかも、その善をなせりといふ滿足は、先にもいふごとく、明日の朝のやうに、永劫に來らないのである。

しからば吾らは遂に善をなし能はずして、本能のまゝに動き、善惡無差別で世を終らねばならないか。これこそ人間の苦痛の中の大苦痛である。すでに善をなさんとする志願、すなはち叡智を惠まれたるものにとつては、この人間唯一の、最初にして最終なる大問題は、たゞ本願を信じ、念佛をまふすといふことによつてのみ根本的に解決せらるゝ。

すでにいふごとく、たゞあるものは煩惱と本願とのみである。これを聖人の表現によれば

白とは卽ちこれ選擇攝取の白業、往相廻向の淨業なり。黑とは卽ちこれ無明煩惱の黑業、二乘人天の雜善なり。（敎行信證）

たとひ善といへども、それが生死海中（相對界中）のものであるかぎり、我執に染著せられたる謂ゆる有漏の善であるにすぎない。

本願はその無明我執の生死海を悲愍して、これを平等一如の世界、自然の報土へと招くものである。その招喚の聲が煩惱のたゞ中より湧き出づる念佛である。

煩惱が煩惱すると同時に、煩惱自らを悲痛する（否定する）のが念佛である。謂ゆる煩惱に內在する彌陀の本願が彼自らを反省するのが念佛である。

この我執煩惱を悲痛するとともにこの我執の生めるる吾らの業一切を自らのものとして自らに負ふて立つ大責任者本願の呼び聲がわが口業にあらはるゝとき、すなはち稱名念佛するとき、自然にこの我執から解放せらるゝ。この我執よりの解放こそ、一切衆生の識域下にある普遍の志願であり、これはかくのごとく本願を信じ、念佛まふすことによりてのみ滿足せしめらるゝのである。

このときかへりみて、かの善をなさんとせし意志、念願の根據をたづねて見る。人が善と名づくるは必ず利他

心のあらはれであり、悪といふは我執にとらはれ、我見を主張し、我愛を全うした場合である。して見れば悪の母胎は我執であり、善の至境は我の滅亡である。その究竟は涅槃界、絶對自由の世界である。故に善は涅槃への過程であり、善をなさんとする志願は、涅槃の招喚である。これを否定するは根本的のあやまりである。

この善を追ふて行つて、善さへも、この生死海にに於ては有漏たるをまぬがれぬと氣づくとき、本願の大道に轉廻せしめらるゝのである。三願轉入の過程は、願生者、淨土の大菩提心をめぐまれたるものゝ必ずすぐべき道程である。

親鸞聖人が

一切群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時にいたるまで、穢悪汚染にして清淨の心なし、虚假諛僞にして眞實の心なし。（教行信證）

と人生及自己の價値に絶望されるまでには、徹頭徹尾善を追求せられたのである。そこにこそ眞實に本願を信受し、「たゞ念佛」するこゝろも生るゝのである。

すでに自己に絶望し、大悲の招喚をわが稱名に於て聞くのであるから、我執は自然に消えしめられるのである。さうしてまた念佛まふして居れば、自然に善悪のけじめ、なすべきことと、なすべからざることゝは念佛の智慧によりて照見し啓示せらるゝのである。

聖人はこれを、その體驗よりして

圓融至德の嘉號は悪を轉じて德と成す正智（教行信證）

萬行圓備の嘉號は障を消し疑を除く（文類）

名を稱するに能く衆生一切の無明を破し、衆生一切の志願を滿てたまふ（教行信證）

と言つて居らるゝ。

されば本願を信ずる人は、念佛によりて自然に轉悪成善せしめらるゝにより、今は他の善は要でないのである。轉悪成善を大いなるよろこびとするかぎり、善は切實の要求であるが、他の善を要とせぬのである。

○悪をもおそるべからず彌陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆゑにと云々

相對悪と絶對悪

もしこゝにいふところの悪を、道德的の悪、世間にいふ悪とするならば、この一節は、明かに道德破壞である。この鈔は世の倫常を破り亂るに役立つ害毒の書にすぎない。

私は久しくこの一節を前にして長い間立ちどまつてゐた。それは遂に踰ゆべからざるヒマラヤであつた。

もしわれらごときに「悪をもおそるべからず」とせられたら、何をするか分ない。悪を怖れつゝ、慎みつゝ行

けばこそ、漸く人間道を踏みはづさずに行けるものをと考へてゐた。

しかるに昨年の夏、この一節を、わが内面に返照しつゝ、くり返し〳〵拜讀するうち、ふと、この一句こそ私一人への本願の呼び聲であると知らしめられた。

自らが惡をなすことを怖れるといふは、善をもなし得ることを豫想してのことである。それは人生及自己の如實の相を知らざる憍慢であつた。

汝善をなし得るや。果していつ善をなし得たか。かう自問自答したとき、佛かねてしろしめてのおことば「曾無一善」。大悲心のかぎりをつくしてのこのおことばが、強いひゞきをなして内奥から聞えて來た。

おもはず頭を下げたことである。

このときわが心眼の前に展け來つたのは、かねて敬讀してゐる拾遺古德傳の下のことばである。

誰のともがらか罪惡生死の名をのがれむ。いづれの類か煩惱成就の體にあらざらむや。造るも造らざるもみな罪體なり、思ふも思はざるもことごとく妄念なり。

まことに「惡をも怖るべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきゆゑに」は本願が我に向つて呼びたまふやるせなき呼び聲である。それはもはや聖教の文字ではない。本願自體の直爾の表現である。それはたゞ惡そのものなる私一人へのさしつけての招喚である。

この一句あつて吾らのごとき存在も世の中で呼吸をして居ることができるのである。

しかしてかしこくもこの一句あつて、われらのごときものも、成佛の可能が保證せられるのである。南無阿彌陀佛。

第二章

おの〳〵十餘ヶ國のさかひをこえて身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふおんこゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知しまた法文等をもしりたるらんとこゝろにくくおぼしめしておはしましてはんべらんはおほきなるあやまりなり。もしからば南部北嶺にもゆゝしき學生だちおほくおはせられて候ふなればかのひと〴〵にもあひたてまつりて往生の要よく〳〵きかるべきなり。親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをかふりて信ずるほかに別の子細なきなり。念佛はまことに淨土に生るゝたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候。そのゆゑは自餘の行をはげみても

佛になるべかりける身が、念佛して地獄にもおちてさふらはゞこそすかされたてまつりてといふ後悔も候らはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

聞法第一の態度

こゝに聖人が「來らしめたまふおんこゝろざし」と、これらの人々の願求の態度を讃仰せられしに深き關心を寄せねばならない。これらの人々は、關東より十三ケ國のさかひを越えて來たのである。聖人は意識してか否か、その背後にある大きな力を仰いで居らるゝのである。

「身命をかへりみずして」と彼等の內面を洞察し表現して居らるゝが、これは聖人自身つねに求道のために不惜身命の態度を持續せられた一人の法藏菩薩であつたからである。內なる法藏の願心が、他の內面のそれを見たのである。

惜身惜命を凡といひ、愛妻愛子を夫といふ。當年常陸より上洛するは命がけであつて恐らくは水盃ぐらゐ交はしたであらう。この身命、妻子をかへりみざる願心は、凡夫以上のものである。限りなく內に求めて止まぬ法藏の願心である。それが不意識界より廻入して來て自己全體をうごかすのである。

げに求むるこゝろこそ與へられたるものである。尋求が招喚である。

「神をおもふのは神がおもふのである」

——エツクハルト——

然らば彼らのもとめて來たものは何か。

學問と宗教との領域

それは往生極樂の道である。しかも念佛よりほかのものである。こゝに此章の大切な存在意義がある。

それは下に明かなるがごとく、彼らの求めて來たものは何がゆゑに念佛するかといふ仔細である。義、原理、論理、わけである。

關東に師のまします間は、たゞ師の感化教化によつて念佛した。師去られてのちも、念佛は相續して居るが、それにはしかとしたすわりがほしい。かういふわけで念佛する、念佛せざるを得ないといふ原理、すなはち義をきゝたい。學問、智慧のすぐれてまします師には、それが明かになつてをつて、あの底力のある、自然にわく、堂々たる念佛が出るにちがひない。おもふに聖人御歸洛ののち、いろ〳〵の異見別解が出て、それに動かされた人たちは、誰に何と言はれても、動かぬといふすわりを得て安心して堂々と念佛したかつたのであらう。さういふ要求からたづねて來たものであることは、答への節々によくあらはれてゐる。

惟ふにこの義をとらへんとするは、本來知性理性の要求である。知識的のものであり、謂ゆる學生沙汰である。宗教的要求なるものではない。

人間の理知は有限であり、從つて相對的である。高下、深淺、優劣さまざまである。故にたとひ一の義、見をにぎつても、それに優り、それより高いものに逢へば、それはくづれる。またそれは個人的のものであるから、人人によつて異なるものであり、智慧各別なるものであり、從つて全人類的の要求ではなく、普遍價値をもたない。また義、見は時代によつて異なるものであり、一個人の上に於ても人生經驗の度合、年齢によつて異なるものであるから永遠價値のあるものではない。

また理性知性にうつたへて滿足しようとするかぎり、それは理知性といふ自己の一部分の滿足であり、最深至奥の要求、全情意、全自己の要求の滿足ではない。人生的要求から出發せるものではない。

ことに念佛の意義を知らうとする所に、自らの理知性を、自ら知らずして信じて居り、從つて自力我慢の態度であつて宗教的ではない。哲學、學問の世界の沙汰である。

畢竟それは分別であり、はからひである。その分別、はからひの奥には自ら知らざる功利心が潜んでゐる。

なぜかと云へば念佛が合理的であらんとする要求は、合理的ならば稱へるし、然らずんば稱へず、別の物にするといふ、念佛を以てすくひに利用しようとするのであつて、念佛そのものが目的ではなく、念佛以外に要求があるのである。そのかぎりその念佛はその要求を滿す手段である。その義が第一義となり、念佛は第二義となる。

所詮それらの義は、人間が念佛に對して付け加へたものであつて、「念佛よりほか」のものである。かくのごときは念佛一つに充足せざるものである。

何故に彼らは念佛一つに滿足せぬか。

彼等は人生の中で人生を解決し、自己の手で自己を始末しようとする立場に立つて居るのである。念佛はその手段である。また念佛してすくはれようとするのである。「いづれの行」の一つである。自己以外に念佛といふものがあり、それと自分と對立し、それを自分がとなへて、自分がすくはれてゆかうとするのである。いはゞ念佛は物質化されてゐる。それを自分の方で意義づけてかゝらねばならぬとするところに、念佛を物質化して居るものがある。念佛卽生命であることを知らない。

上に數次いふごとく、人生をあげて五濁惡世、火宅無常の世界と見るとき、自己をあげて煩惱具足の凡夫と感情するとき、人生及び自己に絶望するとき、その感情自體は彌陀の大悲である。すでに人生の上の次元に立つてゐる。

このときこの濁世と煩惱とを呼ぶ本願招喚の勅命をきくこと卽ち、念佛をまふすよりほかにしかたがないのである。この濁世と煩惱とを自らとする大悲の御名をよぶより他にしかたがないのである。

「たゞ念佛して」

その人生及び自己に絶望しきつたものにして、はじめて「たゞ念佛する」のである。愚癡の法然が念佛するのである。極悪深重の衆生は、他の方便さらになき源信が、ひとへに彌陀を稱するのである。愚禿親鸞が「たゞ念佛する」のである。

ゆゑに、この立場に於ては、念佛そのものが絶對價値である。本願といふ唯一の大生命の表現である。

この行はもろ〳〵の善法を攝し、もろ〳〵の德本を具せり。極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり。

（教行信證）

まことに吾ら今日のこゝろもち全體を擧げて申せば、念佛申させて頂くだけで、今生のしあはせである。それだけで滿足、充足、むしろ有りあまるのである。意義、價値それは要なきものである。

となへしめられてゐるのである。自分が稱へようとすればこそ意義も要る。となへしめられてゐることが、すくひである。となへしめられてゐるといふ感情は、世界全體を以てしても換へがたきものである。このほかにすくひを要しない。これを淨土のたねか、地獄の業かの分別の世界は、いつしか超えしめられて、念佛することに永遠無限を生きてゐるのである。

「念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらふ」

この堂々たる、力づよい、金剛心の名のりともいふべきことばを、この他にどこにもとめ得るか。地獄に墮ちても後悔せぬといふ金剛不壞の大信、本當に念佛の絶對價値を身證したる人の境地、深さのしれぬものがある。仰ぐべきかな。

地獄一定の體驗過程

「いづれの行も及びがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」この底しれぬ深さにさぐり入ることをゆるしたまへ。

いふを許さるゝならば、吾らには上の心と下の心とがある。上の心は意識であり、下の心とは意識不意識を統べての全情意、全自己である。これは意識の下にあるものであるが、それは實に人格行動の根源であつて、底知れぬ力をもつてゐる。吾らの意識の力で左右しえぬものである。親鸞聖人の宿業といへるものである。

いづれの宗教に於ても救濟者と被救濟者とを立てる。

この對立に於て、上の心は外なる救濟者に向ふ。これすくはれんとする要求（意識）からである。すくはれん

とするかぎり、救濟者にその資格を認めらるゝ必要がある故に信仰するといふ條件があり、これに努力するのである。

しかしながら信ぜんとする努力は、實は疑ひと鬪つてゐるのであるから、意識は信ぜんとして努めるが、根づよい下の心は、全自己は疑つて居るのである。疑つて居ればこそ信じようとするのである。事實は信ずる必要のないものである。こゝに一人角力がはじまる。

佛のすくひを信じようと努力するのであるが、實は自分の疑ひと鬪つてゐるのである。この鬪ひにつかれ切つたとき、はじめて自らを顧ると、自分自身は疑ひのかたまりであり、疑惑そのものである。

このとき外の救濟者に向つた目は自己全體、卽ち下の心に向けらるゝ。

自らを見れば見るほど疑惑の底は知れない。親子、夫婦、兄弟の間にすら絶對の信はないではないか。親、妻、子に對し、我を信ぜよといひ得るものがあるか。自らすら自らを信じ得ないではないか。

これ虛假詔僞、穢惡汚染、不眞實、不淸淨、自己をあげて不信そのものである。無邊の業海、無底の暗である。元來これは救ひを要求する資格なきものである。すくひを要求すればこそ信ぜんともしたのである。すくひを要求する資格なし、「いづれの行もおよびがたき身」と、すくひを要求する立場よりはなれしめられたとき、「とても地獄は一定すみかぞかし」の痛感、根本的の自覺がおこる。

外の佛に向いてゐた上の心は、こゝに全く內に向く。その內こそすくはれぬもの、永劫地獄である。このすくはれぬもの、地獄一定といふ感情のたゞ中から念佛が湧く。これは事實である。必然の事實である。たゞ不可思議である。

たゞ念佛するのである。たゞ念佛するのであるが、自己を擧げて念佛するのである。南無阿彌陀佛にまるめらるゝのである。身も南無阿彌陀佛、心も南無阿彌陀佛である。

すくはるゝものもすくひを要求する立場をはなれ、すくふものもすくふ立場をはなれ、たゞ念佛に於て一となるのである。「南無彌陀佛は阿彌陀樣なり私なり」（日性信女）「となふれば我もほとけもなかりけり南無阿彌陀佛々々々々々々」（道元禪師）

主觀、客觀、全く亡じて、純粹客觀、佛々相念の世界がある。

念佛成佛自然である。

念佛のほかに何物をも要求せぬ。これが完全なるすくひである。すくひと名づけられぬすくひである。

○彌陀の本願まことにおはしまさば釋尊の說敎虛言なるべからず。佛說まことにおはしまさば善導の御釋虛言したまふべからず。善導の御釋まことならば法然のおほせそらごとならんや、法然のおほせまことならば親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからず候歟。詮ずるところ愚身が信心におきてはかくのごと

とし。このうへは念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々のおんはからひなりと云々

本願念佛の傳統

普通ならば彌陀の本願の何故に實在するかを證明せんとするが當然であらう。宗教といふ體驗の世界に於ては、それとは趣が違ふのである。體驗は事實である。事實は形式論理を要さぬ。たとひ要しても第二義である。あれば內的必然の論理がある。今はその論理をたどるのである。論理によつて裏付けられるやうな事實ではなく、事實が論理の必然展開である。論理によつて事實が證明されるのではなく、事實の展開そのまゝが必然の論理である。

彌陀の本願の實在は論理以前の事實である。人生とは彌陀の本願の實現しゆく過程である。その內面的事實に於て。

また人生は諸佛稱名に源を發した念佛の開展しゆく歷史である。これほど明かな事實はない。

像末五濁の世となりて　釋迦の遺敎かくれしむ
彌陀の悲願ひろまりて　念佛往生さかりなり

現に念佛往生のほかに眞實の宗敎といふべきものはないではないか。

ゆゑに釋尊も善導も法然も、みな本願を傳統するためにあらはれたまふたのである。否、これらの聖者みな彌陀の本願海中から出現されたのである。本願の傳統、念佛の開展の歷史のうちに入ることに於てのみ、人間は眞實に永遠に生きえられる。

親鸞聖人ほどに傳統を尊んだ人は少い。またこれほど因襲を破つた人もない。敎行信證引用の文に五十幾ケ處まで訓をかへ斷章取義し、それが悉くその原文の眞精神を開顯してゐるのでも分る。

傳統は生命の展開である。聖人は常に形式にとらはれず、形式をつき破つて生命に肉迫し生命を把握した。聖人自身生命自體なるがゆゑに、生命は時代の代表者聖人に於て自由にそれ自身を開展したのである。

かくして彌陀の本願も聖人に於て本來の眞意義を開闡した。三經七祖も聖人なくば、その眞意義は沒却せられたかもしれない。

その傳統それ自身が名告るゆゑに親鸞のまふすむねまたもて空しかるべからず。これをとつて信ぜんともまた捨てんとも面々の御はからひなり。汝は汝の本願によつて汝の道をゆけ。敢てわが道をゆけとにはあらず。これ常に弟子一人ももたずといへる親鸞の態度である。おの〳〵本願と念佛とによりて導かるゝがゆゑに、我も導かれ、人も導かるゝ。たゞ本願念佛の大道があるばかりである。

第三章

善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世の人つねにいはく悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をやと。この條一たんそのいはれあるにたれども本願他力の意趣にそむけり。その故は自力作善の人はひとへに他力をたのむ心かけたるあひだ彌陀の本願にあらず。しかれども、自力の心をひるがへして他力をたのみたてまつれば眞實報土の往生をとぐるなり。煩惱具足の凡夫はいづれの行にても生死を離るゝことあるべからざるをあはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なりと云々。

道徳の善惡　宗教の善惡

もしこの善人悪人を道徳上のそれとすれば、これらのことばは善悪因果を撥無する外道のそれである。この善悪は宗教的のそれである。こゝに善人と謂はるゝものは悪の自覺なきもの、自らの内に悪を發見せざる人々である。自力作善の人である。

悪人とは自らの内につねに悪を發見せる悪の自覺者であり、悪に惱める人々である。道徳上のそれとは全く次元がちがふのである。

悪性さらにやめがたし、こゝろは蛇蝎のごとくなり

を痛感せる人々であり。十悪愚癡の法然、愚禿親鸞とおなじ立場に立つ人々である。常に自己を問題とし他人を問題とせられなかつた祖師が、かういふことを問題とし、ことに世の人云々と曰はるゝのは不審の至りとおもふてゐたが、これは自分の推察の許さるゝかぎり、祖師が善人なほもて往生すいかに況んや悪人をやといふことを、しみ〴〵と感じられたのは、その唯一の機縁であつたと信ぜらるゝのは、觀經の三々九品をくり返し讀誦せらる間に、いつしか感じられ、それがとき〴〵物語にあらはれたものであらうと思ふ。愚禿鈔を精讀すれば、祖師がいかに散善義を耽讀嗜讀せられたかゞ分り、觀經の散善段はつねに深く親しまれたものであらう。

その上品、中品はたしかに善人である。自ら往生の機類を以て任ずる人々である。私はこれを讀誦させて頂くたびに、自分のすがたをそこに發見して怖れおのゝくことである。吾らは念佛往生、他力本願を人に說くになれていつしか自分は當然往生すべきものとおもひこみ、うぬぼれてゐる。實は下品中生に說かるゝ、不淨說法、無有慚愧の悪機類であり、本質は下品下生であるにかゝはらず、それを自覺しようとせず、自覺せざることをおそれもしない。

この散善段を上、中、下とよみゆくうちに、本願の吾らの内面に開展實現してゆく過程を明かに知らせていただく。下中、下下にいたりて極重惡人、無他方便、唯稱彌陀、得生極樂の自覺にいたるのである。九品はこの自覺の開展過程である。

この背後に、これと一しよに動くものが果遂の願心、願力であるのではないか。

故にこの「自力のこゝろをひるがへして」のこのひるがへすは、明かに

定散諸機各別の　自力の三心ひるがへし

如來利他の信心に　通入せんとねがふべし

のひるがへしである。此鈔の筆者が、つねに和讃を讀誦してゐて、このひるがへしが身にしみてゐたのであらう。祖師のこの感懷が不意識に觀經に胚胎せるごとく、此鈔の筆者がこの文字を記せる間にも觀經說法の釋尊の願心が識域下に動いてゐたのであらう。

故に此一章の中心はこのひるがへすである。このことばが此章の根軸をなしてゐる。この根軸を中心にして一切の善人は惡の自覺に轉入するのである。

こゝに惡の自覺といひ、他力をたのむといへば何らかそこにさういふ心理的推移があるやうであるが、惡の自覺自體が本願であり、それが直ちに他力をたのむといふ絕對歸依であり、本願の吾らに於ける顯現である。

故に「他力をたのみたてまつる惡人」といふても、それはさういふ一個人をいふのではなくて宗教的自覺であり、本願體驗であり、本願力である。

「煩惱具足のわれらはいづれの行にても生死を離るゝことあるべからざるを憐れみたまひて願をおこしたまふ本意」この豐かなる宗教的表現は本願等流の旋律である。この「憐れみ」は大悲の願心である。この願心が吾らの內に入るとき、曾無一善、地獄必定の自覺となる。これが「他力をたのみたてまつる惡人」である。これが往生の正因である。惡に內在する彌陀の本願が惡に目ざめしめて、他力をたのましめるのである。この惡人以外に往生の正因はないのである。正機といへば本願と對立することになる。

信心が往生の正因にはちがひないが、この際信心は惡人の主體である。他力の信心を主體とせざるものが善人である。

こゝに留意すべきは利他、他力、本願力といふことばである。親鸞聖人に於て利他は他力である。これは愚禿鈔の自利利他に關する精細なる分析を見ればよくわかる。如來利他の信心は他力信心であり本願力廻向の信心である。この「如來利他の信心に」といふ和讃の左訓にも「本願眞實の信心なり」とある。また「他力とは本願力なり」（敎行信證）とあり「十方群生海この行信に歸命すれば攝取してすてたまはず故に阿彌陀と名づけたてまつる是を他力といふ」とある。されば他力とはまた阿彌陀如來でもある。外他の力といふやうなものではない。

第四章

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみかなしみはぐゝむなり。しかれども思ふがごとくたすけ遂ぐること極めてありがたし。また淨土の慈悲といふは念佛して、いそぎ佛に成りて大慈大悲心をもて思ふが如く衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとほし不便と思ふとも存知のごとくたすけがたければこの慈悲始終なし。しかれば念佛まふすのみぞ末とほりたる大慈悲にて候ふべきと云々。

第五章

親鸞は父母の孝養のためとて一遍にても念佛したること未だ候はず。その故は一切の有情は皆もて世々生々の父母兄弟なり。何れも〳〵この順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり。わが力にてはげむ善にてもさふらはゞこそ念佛を廻向して父母をも助け候はめ。たゞ自力をすてゝ、いそぎさとりをひらきなば、

六道四生のあひだいづれの業苦に沈めりとも、神通力をもてまづ有縁を度すべきなりと云々

自利利他の滿足

これらの文は讀んで字の如しであり、説明の要を見ない。しかしこれらのことばの生れ出て來る母胎、聖人の内面におもひいたると頭が下らざるを得ない。

慈悲云々の條に、あはれみ、かなしみ、はぐくむ、いとほし、不便とおもふ、と同じ心持の語彙が五つ重ねてあるを見ても、聖人がいかに慈悲心の權化であつたかゞ分る。

おもふが如くたすけ遂ぐることありがたしと歎き、存知のごとく助けがたければこの慈悲始終なしと、自らの無慈悲をなげかるゝところより見ても、いかに利益有情に燃えてゐられたかゞ分る。聖人が周圍のものに向つて濺がれた同情、慈愛、悲憐、哀愍が、いかに强かつたかは、その

小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもふまじ

の悲痛なる述懐に見ても拜察せらるゝことである。

これは私の推察ではあるが聖人が晩年關東をあとに京都にかへられたのは、關東に於て教團、家族等周圍のものに對する直接愛に失敗し、自分一人となつて「念佛申すのみぞ末とほりたる大慈悲」と決心して、京都に一人

住居せられたのではないかと思ふ。

まことに一人居ることが一切と共に居ることである。相手があれば自己内面は局限せらるゝ。相手なきとき十方衆生は來りて自己内容となる。一人ゐて念佛することが功德は十方にみつるのである。人の惡を自らの相と見、あらゆる惡を自らの内に見て、本願を憶念し念佛するとき、一切衆生の運命を荷負して居るのである。

また淨土眞宗に二種の廻向ありとして從來七祖の上に、還相に重きをおいた人はなかつたのに聖人ひとり特に(むしろはじめて)還相を往相と同樣に隨喜したに見ても聖人の生活態度如何がしのばるゝことである。

今こゝに還相を詳說する餘裕をもたぬことは遺憾である。たゞ左の和讚を記して眞實の願生者親鸞の聲をきく。

願作佛の心はこれ　　度衆生のこゝろなり、
度衆生の心はこれ　　利他眞實の信心なり。

彌陀の廻向成就して　　往相還相ふたつなり
これらの廻向によりてこそ　　信行ともにえしむなれ

往相廻向の大慈より　　還相廻向の大悲をう、

如來の廻向なかりせば　　淨土の菩提はいかがせん

これらは佛教者の、否、自覺ある人間の等しくもつ一如平等への志願の表現である。

ことにそれは大悲の本願を體驗せるものには等しく抱かざるを得ざるねがひである。自利のみあつて利他なきところに眞實の生のあらう道理はない。眞實に生きるとは他を生きることであり、一切を生きることである。普共諸衆生、往生安樂國は淨土教徒のねがひでなければならない。その代表を聖人に見ることは讃仰の至りである。

第六章

專修念佛のともがらのわが弟子ひとの弟子といふ爭論の候らんこと、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたず候。その故はわがはからひにて、ひとに念佛まふさせ候はゞこそ弟子にても候はめ。ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて念佛まふし候人を、わが弟子とまふすこと極めたる荒涼のことなり。つくべき緣あれば伴ひ、はなるべき緣あれば離るることのあるをも師を背きて人につれて念佛すれば往生すべからざるものなりなんどいふこと不可說なり。如來よりたまはりたる信心を、わがものがほに、とりかへさんとまふすにや。かへすゞもあるべからざることなり。自然のことわりにあひかなはば佛恩をもし

り、また師の恩をも知るべきなりと云々

「弟子一人ももたず」の宗教的意義

この章には二つの重大な問題が含まれてゐる。その一は「親鸞は弟子一人ももたず」でゐる。凡そ一宗開闢の祖師にして弟子をもたずといふのは古來一人もない。親鸞聖人ひとりこの通格を破つてゐる。而してそれが本願念佛の宗教の特質をよくあらはしてゐる。

第一絶對の智光に照し出されて見れば、吾身は愚禿であり、罪業深重の凡夫である。たゞ彌陀の本願を仰ぎ、念佛まふすばかりである。人を教へ導く即ち弟子をもつ資格は微塵もない。

第二に道德の世界に於ては人の德行を模するといふこともあらう。宗教の世界に於ては本願に目ざめしめられ、冥の照覽に導かるゝのである。智慧の念佛によりて、自然に自己を超え人生を超えしめらるる。たとひいかに德光道譽の高き人があつて、その人格を慕ふたとしても、それを模することは他者となることであり、また付燒刃にすぎぬ。

自己創造の統一態としては、あくまでも本願名號を仰ぐよりほかはない。

教法はどこまでも聞き道も求めねばならぬ。故に善知識をもとむべきは必須である。しかしその善知識は必ず本願の體驗者でなくてはならない。われらは本願の導きによりて本願の體驗者、眞の知識をえらぶべき智慧を惠まるる。眞實のみ眞實を求め、擇び得る。一切の功利心をはなれて眞實に生命的願求に燃ゆるもののみ、眞の知識、本願の體驗者にあひ、本願の傳統に參入し得るのである。

このとき善知識のことばは本願の表現なるがゆゑに、善知識を通して本願にあふのである。ともに本願海中のものとなるのである。

かるが故に聖人はあくまでも傳統を重んじ高僧の說に隨順されたのであるが、決して先蹤をそのまゝ踏襲せず、教行信證にも幾多の轉釋があり、先師になき獨自の體驗を堂々と表白して居らるゝ。それは絶對謙虛にして自己なきが故に、本願の眞生命は親鸞聖人に於て遺憾なく開展し全現するのである。

本願の前に全く私なき態度に於てのみ眞實の傳統は展開し、踏襲から免れ得るのである。自らは少しも獨創なりと自覺せざるところに、たゞ體驗に忠實なるところにのみ、獨創の形を以て眞生命は具現する。かくの如くにして唯一眞實の道淨土眞宗は生れたのである。

故に吾らが眞に親鸞聖人の弟子たんとするには、親鸞聖人の體驗を通して本願を體驗することに於てのみ、成就するのである。

この弟子一人ももたずといふことは、自分も人の弟子たらざることである。本願の傳統者としての善知識はこ

れを仰ぐ。「阿彌陀如來來化して、本師源空とおはしけれ」。それは化現として仰ぐのである。たゞ人ならば仰ぐことも、またこれに附くこともない。

この立場が（親鸞聖人に於て特に著しく目立つことであるが）諸佛とひとし、彌勒と同じ、教主世尊がわが親友ぞとほめたまふを感じもし、隨喜せしめるのである。

稱ふる念佛と稱へしめらるゝ念佛

此章の含む第二の問題は、念佛は本願の名のりであつてわが稱ふるものではなく、稱へしめられるものであるといふことである。

稱名念佛は自らの稱ふるものでなく彌陀の御もようしによつて稱へるものであり、本願のわが口業をかりての名告りであるといふことは歎異鈔には表はれてゐるが、祖師の自筆にはないやうである。然し說明的にではなく體驗的には表はされてある。

かの行卷の

名を稱するに能く衆生一切の無明を破し能く衆生一切の志願を滿てたまふ。稱名は則ちこれ最勝眞妙の正業なり、正業はすなはちこれ念佛なり。念佛はすなはちこれ南無阿彌陀佛なり。南無阿彌陀佛はすなはち

これ正念なりとしるべし。（敎行信證）

といふ一段の意味が古來難解とせられし所以は、稱名を以て衆生の能行卽ち自分の稱へるものとするからである。云はばこの稱名といふ大行を、能所分別の世界に引き下し、衆生の能行、すなはち個人の經驗的事實とするからである。

親鸞聖人における稱名はさういふものではない。

聖人は自ら意識せられたのではあるまいが、その著作にあたつて、つねに體驗を記して居られる。元來曇鸞大師の「無碍光如來の名號は——」と記されたのを「名を稱するに——」と書きかへられたのは、名號の體餘を記されたのである。

これは所行の名號を、もしくは法體大行なるものを、能行にしたのではなく、體驗の世界に於いては、稱名のほかに名號はないのである。

そも〳〵吾らのごとき煩惱具足の凡夫が、果して念佛の申せるしろものであらうか。

これを可能とする人は、自らの如實の相を見ざるものである。價値批判の目が眩んだものである。

しかしてまた稱名が、諸佛の稱名であり淨法界等流のものたることを知らざるものである。

宗敎意識の深い人ほど、自らの稱ふる念佛を否定して居らるゝやうである。

親鸞聖人の態度はつねにさうであつた。

ひとへに彌陀のおんもよほしにあづかりて念佛まふしさふらふひとを、わが弟子とまふすこと、きはめたる荒涼のことなり

まづ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまゐらせて生死を出づべしと信じて、念佛のまふさるるも、如來のおんはからひなりとおもへば、すこしもわがはからひまじはらざるが故に、佛願に相應して眞實報土に往生するなり。

香樹院德龍師が

業で口がしぶつて念佛が申されぬ

と申されたことばに、私はいつも不思議な感動をおぼえる。

常に原始的なる本願は、常にわれらの煩惱海に廻入して、念佛したまふ。しかるにその稱名のあらはれないのは、業によりて、口が縛られてあるからである。これは事實である。

稱ふるが聞くのなり

その人が本願の體驗者であり、その人のことばが本願の表現そのものであるといふ人にかぎり、稱名は、つねに自ら稱ふるものでないとせられるやうである。

香樹院師曰く、我が稱へる念佛と云ふもの何處にありや。稱へさせる人なくして、罪惡の我が身何ぞ稱ふることを得む。稱へさせる人ありて稱へさせ給ふ念佛なれば、抑もこの念佛は、何のために成就して、何のために稱へさせ給ふやと、心を碎きて思へば、卽ちこれ常に稱ふるが常に聞くのなり、と。

いかに考へても稱名といふのは、わが口業に於ける本願の行業であり、表現である。私に代つて、私となつて稱ふる本願のよび聲であり名のりである。吾らは、ただそれを聞くのである。聞くほかに能なき吾等である。

本願の世界には、自ら稱ふるといふことなく、稱へしめらるゝのである。如來のおんはからひなりとおもへば、すこしもわがはからひまじはらざるものである。

彌陀の御もよほしにあづかつて申すのである。おんもよほしと言つても、外的に存在して催させるのではなく、念佛申さんとおもひたつこゝろとなりたまふのである。

親鸞聖人以前の淨土敎の宗師たちが、大して問題にせられなかつた第十七願を、第十八願と相竝ぶ位置におき、「敎行信證」に於ても敎卷のあとに、直ちに行卷があり、次で信卷といふ順序になり稱名を淨土眞實の行、選擇本願の行と標擧し、「大行とは無碍光如來の名を稱するなり」とせられたる態度には深いものがあるやうである。

それは聖人は、諸佛の稱名なるものに大いなる意味を發見し、感ぜられたものに相違ないとおもはれる。

三國に淨土の高僧たちのあらはれたまふたのも彌陀の本願の開展であり、「像末五濁の世となりて、釋迦の遺教かくれしむ、彌陀の悲願ひろまりて、念佛往生さかりなり」しなる所以は、諸佛稱名の歷史的展開と見られたのであらう。

ゆゑに吾等の稱ふる稱名は、われらの念佛でなく、諸佛稱名の等流であり、吾等は、吾等の口業にあらはるゝ諸佛の稱名を、正覺大音を、本願招喚の勅命をきくのである。

稱ふるとは、かるがゆゑに、どこまでもたゞ聞くことである。聞其名號の外に眞實の宗教はあり得ない。

第七章

念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば信心の行者には天神地祇も敬服し、魔界外道も障礙することなし。罪惡も業報を感ずること能はず、諸善も及ぶことなきゆゑなりと云々

無碍自由の念佛生活

この章に於て「念佛は」とあるべきを「念佛者」といふはたゞの字を誤寫したのではないかといふ說もあり、古來いろ〳〵に考察、研尋がかさねられてある。しかし私は念佛といふも念佛者といふも同じことであると思ふ。念佛行者の體驗表現とならざる念佛といふものはあり得ない。念佛が念佛するとき、必ず行者に於てその表現をとる。

凡そ一切は表現である。象徵である。本願といふも、それが行者に廻向せられて、行者の體驗となるとき完全に成就するのである。

念佛も行者の稱名に於てはじめて念佛である。念佛とは念佛行者である。ことにそれが無碍の一道となるのは必ず行者の生活（行）に於てである。

道とは個人の生活方法ではない。個人のそれは我執が主體であるから行き詰りがある。念佛が主體となるときそれは智慧の念佛といはれ、淨法界等流の行あり、平等大悲の表現であるから、まづ稱ふるものゝ我執が知らずして自然に否定せらるゝ。故に其生活には我執の生み出すことによつてのみある行き詰りがない。無碍の一道である。惟ふに無碍とは眞實の自由であらう。吾らに眞實の自由の得られないのは我執、個我の執着が我自らを縛るからである。念佛して我執の自然に否定せらるゝところに自由が得られる。個人は、かくて念佛によりて全人となる。道とは全人の生活態度である。

天神地祇といふも諸佛の化現である。一切諸佛は彌陀の本願の稱揚者なるがゆゑに、念佛者はその敬伏を受け

るのである。念佛は本願の表現であり、本願相應の行であるから。

念佛者、信心の行者ほど人を敬ふものはない。念佛者にとりては一切衆生は一切諸佛である。みな聞法の機緣をあたへたまふ權者である。凡そ輕蔑するものは輕蔑せられ、尊敬するものは尊敬せらるゝ。かくて念佛者ほど尊敬せらるゝものはない。

魔界外道はつねに吾らの內面に跳梁する。異學異見、別解別行、天魔波旬、まことにわが胸の內は百鬼夜行である。たゞ念佛すれば、それがありつゝ、それらのあることを緣として、慚愧稱名するところに、それらはそれらの力を揮ふ餘地がなくなるのである。

「罪惡も業報を感ずること能はず」——罪惡も業報もともに內面的のものである。自らの身口意の三業に對して嚴肅なる批判を下したとき、心に痛みを感じないものはあるまい。これが罪惡である。この罪惡感の强いものに於ては、自らの受けた苦惱は、みな業報と見る。

念佛者は、その念佛の智慧に照らさるゝが故に、智慧が主體となれば、客體として照し出さるゝものは、煩惱熾盛罪惡深重である。この自覺の前には、いかなる苦惱も障りも災もみな忍受せらるゝ。むしろこれによつて前業を果さしていたゞくといふよろこびと轉ずる。價値は全く轉換する。

かくのごとく業報を、どこまでも忍受してゆくとき「これも業報である」といふ苦痛感は自然に解消せらるゝ。苦惱を忍受するとき、それを聞法念佛の機緣とするとき、苦惱もむしろ醍醐の味となる。「この苦惱あればこそ」とよろこばるゝことである。苦惱に生き甲斐を感ぜしめらるゝ。「かういふ事を受けねばならなかつたか」と業報を客觀化するところには、なほ一分のこだわりがある。眞實の忍受とはいはれない。まことに念佛して一切を忍受し一切を負ふて立つとき、人生のもろ〳〵の事象、かすものこらず妙味として嘗めつくさるべきである。この「罪惡も業報を感ずる能はず」を最も具體的に表現したものは、一形惡をつくれども、專精にこゝろをかけしめて、つねに彌陀を稱すれば、諸障自然にのぞこりぬ」であらう。

諸善の及ばざる所以

「諸善もおよぶことなきゆゑに」。諸善とは所詮二乘人天の黑業である。人間のなす善なるが故に有漏である。彌陀の名號は光壽無量の覺體自身の名のりであり、諸の善法を攝し、諸の善本を具し、眞如一實の功德寶海であつて、行者が念佛するとき、それは極速に圓滿する。諸善とは次元がちがうのである。

惟ふに諸善は善をなさんとする意志によりてなされ、われ善をなせりといふ意識が伴ふ。

そのかぎりそれは道德的のものであつて、宗教的のものではない。またその意志と意識とは自己を繫縛して自由ならしめない。眞實の自己、眞生命は、意志以前、意識以前の純粹行に於てそれ自身を自由に展開する。

念佛は彌陀の御もようしによりて稱へしめられ、自らはからはざるに轉惡成善せしめらるゝ。雲のゆくごとく水の流るゝごとく自然に善を行ぜしめられて居り、善を善とおもはずして善をなし、善をなして善を忘れる。これ諸善のおよぶ能はざるところである。

念佛は根本的に眞實に人間に自由を與へる。自然法爾とは念佛に於てのみ言はるべきことばである。すなはち無碍の一道、無碍の行、無碍自在の生活である。それが念佛者である。

第八章

念佛は行者のためには非行非善なり、わがはからひにて行ずるにあらざれば非行といふ。わがはからひにてつくる善にあらざれば非善といふ。ひとへに他力にして自力をはなれたる故に行者のためには非行非善なりと云々。

非行非善

これは前章の心もちにすわつて味解すればその眞意は明かである。むしろ前章の眞意を明かにするに力があるやうである。この兩章をくり返し相照映することによつて念佛の眞諦はいよ〳〵明かに、ます〳〵深まることであらう。かくすることによつて、いかに念佛が聖人の「いのち」であつたかゞ窺はるゝであらう。これらの文字の奥に、聖人がこの境地に參徹せられるまで、いかに自らの「はからひ」と闘はれたかが、ほのかに讀まれて尊い。はからひそのものなる自己が、はからひ、はからひ盡して、遂に自己をすてしめられて、大いなるはからひにはからはるゝ「ひとへ他力」の世界にまで到達せられた泣血の苦闘を仰がざるを得ない。

これは念佛の說明ではなく、聖人の苦がき體驗の告白である。

第九章

念佛まふし候へども踊躍歡喜の心おろそかに候ふこと、また急ぎ淨土へまひりたき心の候はぬは、いかにと候ふべきことにて候ふやらんと申しいれて候ひしかば親鸞もこの不審ありつるに唯圓房おなじ心にてありけり。よく〳〵案じみれば天におどり地に踊るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにていよ〳〵往生は一定とおもひたまふべきなり。喜ぶべき心を抑へて喜ばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりと知られて

いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり。また浄土へ急ぎまゐりたき心のなくて、いさゝか所勞のこともあれば死なんずるやらんと心ぼそくおぼゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫より今まで流轉せる苦惱の舊里はすてがたく未だ生れざる安養の浄土はこひしからず候こと、まことによく〳〵煩惱の興盛に候ふにこそ。名殘おしくおもへども娑婆の緣つきて力なくして終るとき彼の土へはまゐるべきなり。いそぎまゐりたき心のなきものを殊に憫みたまふなり。これにつけてこそいよ〳〵大悲大願はたのもしく往生は決定とぞんじ候へ。踊躍歡喜の心もあり急ぎ浄土へまゐりたく候はんには、煩惱のなきやらんとあやしく候ひなましと云々

願生者必然の惱み

もしわが文學史上に名文をもとめるなちば、この鈔の第二と此章と結歎の文とは必ず擧げらるべきものであらう。尤もこの鈔にはこれらの他にも一見名文らしき名文ならざる、力づよく、生命あふるゝ文字もあるが。此章の特色はいかなる浄土教徒もが、必ず經驗することであつて、而も未だ誰もが言ひ表はしえざる宗教經驗と感情とを、實に寸分の遺憾もなく表現された點にある。

一字一字が露の玉でつゞられてあるかと思はるゝまでに美しく、これを誦すれば、一つ一つのかな文字までも美妙の音聲を奏づるやうであり、しかもそれらの底に、かぎりなき悲しみと惱みとが夜霧の下の谷川のせゝらぎの如く響きながれてゐる。

これを讀んでおぼえず胸がせまるとともに、そこに自らの相を發見せざるものに宗教感情は語れない。

この章に對しては私は、何のことばも挿むべき要を見ない。

たゞ「よろこぶべきことをおさへてよろこばせざるは煩惱の所爲なり」といひ、ことに「まことに煩惱の興盛に候にこそ、なごりおしくおもへども、娑婆の緣つきて力なくしておはるとき、かの土へはまひるべきなり」の節々、よくもこれまでに祖師の直白を記憶して記しておいて下されたことぞと、そゞろ感謝に堪えない。

またこの章に煩惱といふことばが五ヶ所ある。これ實に祖師が、いかに煩惱を問題とし煩惱感をはなれず、煩惱を見つめ、煩惱を談じたまひしかを物語るもので、そゞろに祖師のおもかげを拜しまひらする思ひをなし、この忠實なる筆錄に感謝をさゝげることである。

まことに煩惱といへば、すでに本願の内容であり、本願されつゝあるものであり、その煩惱を悲傷する感情が大悲のあらはれである。

第十章

念佛には無義をもて義とす。不可稱、不可說、不可思議のゆゑに

「無義をもて義とす」の意味

もし聖人に念佛に對する定義といふやうなものがあるとすれば、この「念佛には無義をもて義とす、不可稱不可說不可思議のゆゑに」といふ體驗的表現である。

しかしこれは念佛の定義ではなく、念佛體驗の表現である。

念佛は「義なきを以て」の、はじめの義は理知的に念佛の意義を理解せんとする心（第二章說明參照）であり、「義とす」といふ後の義は本質であらう。つまり念佛ははからひ（義）を否定することを以て本質とするといふところであらう。

不可稱不可說不可思議は、こゝろもおよばず、ことばもたえたるものなるが故に純粹經驗であり、體驗であり、思議以前である。思は意志であり、議は意識であつて、ともにはからひであることは前にものべた。

念佛は吾らの煩惱熾盛、罪業深重を常に招喚する本願の、吾らの口業に於ける表現である。

（第五章說明參照）

故に念佛は吾らの思議以前のものであるとともに思議を許さず容れず、思議を否定するものである。その念佛は吾らの我執を悲愍する大悲本願の表現なるが故に、換言すれば我執に內在して我執を悲しみ、我執を否定せんがために表はるゝものなるが故に、自然に、一切のよしあしのはからひ、それより起る貪、瞋、癡の煩惱も自然に消されてゆくのである。能く衆生一切の無明を破するものである。

（こゝに特記することは、第十章の「そもそもかの」より結末までは、頁數を制限せられてある故に、止むなく主要でない部分は本文すらこれを記すことを避け、そのうち最も深い宗教的意義を有する部分のみを擧げて講讃することとした。遺憾の極なれど致し方なし）

第十一章

誓願と名號との關係

この章は誓願と名號とは本質を同じくするものなることを明かにしたのである。（第一章說明參照）本鈔筆者の筆走りゆきてゆくりなくも

誓願の不思議によりて、やすくたもち、となへ易き名號を案じ出したまひて、この名字を稱へむものを、

かへとらんと御約束あることなれば、（以下第六章の下に引用）

の簡明適切にして、情理ならび盡せる、さうして力ある表現となり、これによりて爾後幾千萬の心靈のすくはれたこと、尊さの限りである

もし此鈔のこゝに本願のよび聲を見出さなかつたら、この世はいかに淋しき人生であつたであらう。この一節は私の生命の糧である。

第十二章

學問と宗教との關係

この章は學問と宗教との關係を明かにせんとしたものである。これは學を重んずるものが學問なきは往生不定といひたるに對しての、かなり激越な調子の抗議である。しかしこの手嚴しい訓誡の深意を汲み得ない人々は、やゝもすると信心を高調するの餘り、學問を輕視せんとするまでに到る。

永平寺二祖孤雲懷奘禪師が道元禪師に「道心あつくして學問少きものと、學問ありて道心薄きものと、どちらが最後は勝つか」と聞いたら「道心うとくとも學問ある方最後は勝つ」と答へて居らるゝ。

信心の智慧の第一義であることはいふまでもない。求道心、菩提心なきのもゝ學問が、やゝともすれば禍となることも言ふまでもない。しかしその底に生死を出でんとする願心あつての學問は、すればする程、大益あるものと思ふ。法然房にあの智慧と學問とがなかつたら、あの廻心とあの開宗とがあつたかどうかは疑問である。

淺學の人はドグマに陷り易い。やゝもすれば自らの信ずる處に固執して遂に井底の蛙たることを誇りとするにいたる。それが實に多數である。怖れても怖れても怖るべきである。見解、知識の狹いことは決して誇りではない。學問することも態度によつては宗教である。

あらゆる立場の上に立つて、あらゆる立場を統一するものが宗教である。

親鸞聖人も、セント、アウガスチンも大哲學者であればこそ大宗教家であり、大宗教家であればこそ大哲學者であつた。パスカルにあの深い數學知識がなかつたら、彼の宗教經驗が、いかに淺いものであつたかも自明の理である。

第十三章

佛教一般の宿業觀と親鸞聖人の宿業感

この章は本願ぼこりを排するものに對して、あくまでもそれを高調せんとしたものであるが、その主題よりも、こゝに端なくも祖師の宿業感を說き明したところに、この章は大いなる光を放つ。

ことに祖師の宿業感と世間普通にいふところのそれとは正反對ともいふべき相違のあることを明にしたところに、おそらく著者として豫期せざる大功績がある。

一般にいふ宿業は、何か自らが災禍、貧困その他の苦惱を受けたとき、これも宿業であるとする處にあるやうである。元來これらの苦惱は、樂み、幸福を豫期するところから起るのであるが、それを宿業と諦觀して、それを自らの原因として自らに負ふてゆくといふは、深き智慧があるのでなくてはできないことである。これはたしかに宗教經驗のめぐみである。

しかし更に思惟すれば、その苦惱は、多く外から被らされるものである。また苦痛、悲愛等は、精神上のことではあるが、主として外的のものである。苦痛は苦痛であらうが道德的のものではない。

これらは道德意識の高い親鸞聖人の態度とは、全然別である。聖人に於ては自らのうちに人を憎むといふごとき醜く、あさましき心の起るのを宿業としてなげくのである。

自らはあくまでも造らじとする罪を、自らの意識に反して造らざるを得ざる自らを宿業として自ら悲痛するのである。「故聖人のおほせには兎毛羊毛のさきにゐるつゆばかりも、つくる罪の宿業にあらずといふことなし」その價値意識の高さを見よ。

宿業觀はいづれも宗教的なものではあるが、前者のそれは佛教一般の智慧、因果の道理を聞いて起る人生諦觀であるが、親鸞聖人のは本願の立場に立つてのことである。そこにこの兩者の根本的相違のあることを知りたいものである。この一章、これを明かにして宗教文獻史上、實に不朽の生命をもつ。

私はこゝで一般宿業觀と純粹宗教的なる、本願の立場に立つての宿業感とを、今少し考察するのを無用とせぬものである。

一般宿業觀は過去の業を今果すのである。苦惱の根源を過去の業に求めるのである。さうして過去に蒔いた種を、今刈るのである。そこには空間的時間の因果律が見らるゝやうである。

それは過去の自己の業因を、今の自己の業報として受け、今の自己がこれを果してゐるのである。內面的では

あつても、過去、現在の關係に空間的線があるやうである。それは未來をも現在に統一せぬのがその特徴であり、從つて空間的であることは爭はれず、現在でその意識線は切れる。

しかるに親鸞聖人のいふ宿業は、たゞ自己が過去の業を果すのではなく、限りなく起きて來る罪に自らおどろき、無始以來の宿業の集積、總體を今の自己に見るのである。宿業全體が今の自己である。

一般宿業觀には、その業を負ひ、今これを果すといふ安らかさがある。從つて未來を見る必要はない。

しかるにこの宗教的宿業感には現實の自己を見る一念の上に、過現未の三世が感見せらるゝ。

わが身は現に罪惡生死の凡夫である。故に曠劫より常に沒し常に流轉せるものである。現實の罪惡生死が、過去の常沒常流轉を見せ、過去のそれが直ちに現實の自己である。

同時にこの業は、自己そのものなるがゆゑに、自らの手をもつて滅ぼせるわけのものではなく、未來の出離の緣なきものである。

この宿業感は、當然この業を自らのものとして五劫に思惟し、これを償はんがために永劫に修行せし本願が、我に於てこれを見るのである。本願のもの、本願の對象なるが故に。我の智慧によつて見たものではない。

ゆゑにこの宿業をおそるゝ自己は、たゞ「業緣にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまゐらせて」念佛まふすことに於て解放され、自由を獲るのである　すべて本願海中の心のあゆみである

本願ぼこり

この章の主題の本願ぼこりといふこと、聖人にこの態度があつたか、なかつたか、今俄に斷じ難いが、それは別として宗教上、大問題である。

ある求道者が、本願ぼこりの話をきゝ、「本願ぼこりと言はるゝほどに信じて見たい」といふた眞劍な心もちには深い同情と尊敬とをさゝげる。しかしかういふ一生求道聞法を以て終ることを悔ゐず、よろこびとする宗教人は極めて少い。むしろ絕無であらう。

「願にほこりて、つくる罪も宿業の催すゆゑなり」として安心しきつて造罪を怖れず、耻ぢないやから幾千萬とも數が知れない。

反省が宗教の要諦である。宗教人はどこまでも自己に忠實であらねばならぬ。自己を忘失せるところに本願の道があらう道理はない。

見よ、聖人がいかに常に自己を問題とし自己を悲しみ傷みたまふたかを。一生を通じて反省また反省の連續、自己悲傷そのものであつた祖師の嚴肅なる態度を離れては危險千萬である。怖れても怖るべきである。

惡性さらにやめがたし、心は蛇蝎のごとくなり

この中に自己を發見しておのゝかざるものに宗教性は芽生えず、本願にあふ道は絶えるであらう。

私は本願に對する態度に三階段あるとおもふ。その第一は五劫思惟、永劫の修行が濟んで本願名號成就と聞いて、それではわが往生の行業は成滿した、あらうれしやとよろこぶ。これが上品の機類といふものであらうか。善人なほもて往生するたぐひである。

第二は五兆の願行成就ときいて何よりもおろそかにしてならぬは御禮報謝であるとして、念佛も申し、佛法世間のためにも報恩の奉仕をするといふ。これは中品の機類といふべきか。少しは自らを問題にしてゐるだけ宗教意識は深まつてゐる。

第三は五劫の思惟ときいて、五劫の間もこの私の業煩惱をわがものとしてお考へ下さらねばならなかつたのかと、自らの罪業の限りなき深さ重さにおどろき、殊に佛が永劫の修行をして下さらねば償ひがたきわが罪業かと、深く自ら慚愧して、よく念佛し、本願のお思召に背かざらんと志す、これが下品の自覺ともいふべきか。祖師は終生この境地を離れられなかつたのであらう。

香樹院德龍師曰く「これでも助かると思ふてゐるのが、はからうてをるのぢや」

自らを忘れるほど恐ろしいことはなく、さうしてそれは斷じて宗教的ではない。

（第十四、十五、十六、十七、十八の各章は遺憾ながら講讃の餘白をもたない。本文の熟讀を希ふ）

總結

「右條々はみなもて」より後は結歎ともいふべきものであるが、私は便宜上、文意の必然として前後の二つに分ける。前節を「此書に添へまゐらせてさふらふなり」を以て終りとし、「聖人のつねの仰せには」よりを後節とし、全然別のものとする。

さうしてこの「聖人のつねの仰せ」より以後「念佛のみぞまことにておはします」までこそ實に古今東西に比類少き尊く深き宗教文獻といふべきであらう。

如來廻向の信

信心諍論の條は、如來廻向の信心といふことを宗教一般の信仰、信念といふものと擇ぶためには、實に適當なる記述である。

この信仰、信念と、本願力廻向の信心とを、やゝもすれば、それが眞宗の僧俗すらも混同してゐるが、これは全く本質の違ふものである。もしこれを混同するとなれば、祖師の三信釋といふ深刻なる體驗記錄は無視される

わけであり、全然淨土眞宗は成り立たなくなる。またこゝには「たまはる」といふ文字がある。これこそ廻向を最も適當に日本語に飜譯されたものであらうと思ふ。法然親鸞兩祖が果してかゝることばを使はれたとすれば、これを體驗し表白せらるるまでの長い內面の苦鬪、さこそとしのばるゝことである。

極難の信

聖人は反省するために生れた人のやうである。つねに反省し反省してやまぬたましひが親鸞といふ人格であつた。

いま宗教に於て神を信じ佛を信ずるといふ。この場合その神佛と人間とは對立してゐる。この對立ゆゑにこの信は容易なるがごとくにして至難である。（こゝに記す自力信より他力信への轉回は「一念佛まふさんと思ひたつ心」の下に略記したが、玆に更に詳記する事を許されたい。）

元來事實は信ずるを要せぬものである。鷺は白し鴉は黑しは事實であつて信ずるを要しない。

宗教に於て常に信は談ぜらるゝが、信ぜんとする場合、疑は必ず豫想されてゐる。むしろ疑ふてゐるから信じようとするのである。はじめから疑はねば信ぜんとする努力も要らない。

信ぜんとする努力は、その信ぜんとする對象たる佛に向つてなされてあるよりは、自らの疑ひと鬪つてゐるのである。そのかぎり、それは自分と鬪つてゐるのであるから永劫この鬪ひの終るときはない。

更に省察すれば信ずるものを救ふといふならば、信ぜぬものは救はぬといふ條件つきの彌陀を豫想してゐる。さういふ條件つきの救濟は相對的のものであつて絕對的のものでない。それこそ疑はるべきものである。これらの疑問に到着して、別言すれば信ぜんとする努力のかぎりを盡して、これに失敗し、靜かに自己を省察するとき、自己は「不信」そのものである。いま周圍にある親子、兄弟、夫婦の間にすら純粹なる信をもち得ざる自らであるのみならず、自分そのものすら、自分にとつて信じられないしろものである。虛假不實そのものである。疑惑のかたまりである。

かうして彼方に描いた對立的の救濟者彌陀に向つた目を、一たび自らに向けたとき、自分ほどわけのわからぬ、仕方のないものはないといふことが、不思議にも分つて來る。

これが果して自己といふものか。もしこれが自己なら、自分の思ふとほりになりさうなものである。自分は自分であつて、而も自分のものではない。

靜かに自己の內面をながめて見ると底知れぬ暗である。魔ケ淵である。百鬼夜行である。「つくる罪の宿業にあらずといふことなし」曠劫以來の業の集積が自己なるものであつて、今の自己の意志意識のまゝにならぬものである。これは自己ではなくて、自己とおもはれてゐるものであつて、本質は業煩惱そのものである。さうして

自己とおもはれてゐるものは、一の自己ではなくて、相關緣起の具體的現實の生は、十方衆生である。無明海に流轉し諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられてゐる一切群生海である。

これ永劫すくはれざるものである。永劫すくはれないものが自己と云はるゝものである。

純粹なる宗教感情

人間はすべてのものを自己のために利用せんとする傾きをもつてゐる。今こゝに一椀の御飯がある。多くは、これによつて腹をふくらさうといふ。これ利用價値である。これは御飯となつてしまつた結果そのものを利用するのである。

これが宗教的態度となるとき、その結果より因にさかのぼり、この御飯の出來る因にまではいつてゆく。農夫の種まき、とり入れ、天日の照育、大地のはぐゝみ、それら一切の恩澤あつまつてこの一飯となる。これに對するとき、これらの大恩を感謝し、それを禮拜して戴くべきである。それを通して惠みをいたゞくのである。

たゞ佛を信ぜねば助からぬとして信じにかゝるのであるが、その心理的根據は、信ずれば助かるといふ助けを豫想して居るのである。

本願を信じ念佛を申すといふも、その本願名號を以て助かりたいといふ欲望滿足に利用しがちである。これが凡情であり、功利主義を脱しきれぬ悲しさである。のみならず、その心の奥底には、助けを要求する資格ありとする憍慢がある。しかれば畢竟かの信ぜんとする努力も、この自己を買ひかぶれる、憍慢のなしわざである。前に記せるごとく、この自己なるものは、永劫すくはるべからざるものである。むしろ救ひを求める資格なきものである。

この自覺の起る端的、その成就された結果の本願名號より、更にその因にさかのぼりて、この救はれざるものの為に本願を發し名號を成就せざるを得なかつた法藏菩薩の願心にはいつてゆくのである。

信ぜんとしたのも本願のはからひであり、その失敗せざるを得なかつたのも本願のはからひである。失敗せしめたのは自己の本質に目ざめしめんとする果遂の誓ひである。

彼方に描いた救ひの對象に對して勵みたる「いづれの行」も、遂に及びがたしと投げ出したとき、その外的の偶像はいつしか消えて、たゞ内に向ひ内に求める。この内、自己の本質なるものは、底知れぬ暗であり、邪見憍慢の惡衆生であり、逆謗の死骸であつて、永劫すくはれぬものである。この時いつしか救ひを要求する功利心を奪はれて地獄は一定すみかなりとしてすくひを求めることは止め、このすくはれぬ者のために五劫の間思惟せざるを得ざりし法藏菩薩の願心の中へはいつてゆくのである。

このとき常思惟の菩薩の願心は、わが内に入りて廻向して眞自己となりつゝあるのである。その聲が

彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり

である。

十方衆生の代表者親鸞

こゝに「ひとへに親鸞一人がためなりけり」といふところに深き宗教意識を發見せしめらるゝ。

親鸞とは呼ばれたる名である。汝である。それはすでに自己と考へられたる自己ではない。一の十方衆生である。彌陀が彌陀たらんとして、もし我佛を得たらんにといふ端的に發見されたる十方衆生であり、一切群生海である。

すくはれぬといふ自覺の下に、永劫すくはれざる十方衆生を代表して五劫思惟を仰ぎ、その中に自らのすがたを發見し、願心の立場に立つて、汝親鸞を見て居らるゝのである。このとき親鸞は、實はすでに不退の菩薩である。

親鸞聖人の現實的精神

さらに注目すべきは、「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを」の、あくまで具體的、現實的なる聖人の態度である。

聖人にとつては常に自らの業が問題であつた。この自らの業を見、業を問題とする主觀に於てこそ五劫の思惟にも同感され、五劫思惟ときいて直ちに「そくばくの業」が內感せらるゝのである。

さま〴〵の生活經驗に於て、常に見せつけられるのは自らの宿業の恐ろしさである。それにおのゝくと共に、この業を自らの業として、五劫のあひだ泣かざるを得ざりし法藏菩薩の願心が、いよ〳〵仰がるゝのである。

この立場にいたると、宗教一般にいふところのすくふ、すくはるゝといふことばの如きは、極めて他人がましく、また生溫いものである。すでに救ひを要求する資格なしといふ目ざめを與へられてゐる。すくひをよろこぶよりも、その前に、このすくはれざる「そくばくの業」をもちける身を、たすけんと思召したちける本願の、そのおぼしめしがかたじけないのである。成就された本願よりも、法藏因位の願心がかたじけないのである。

こゝに全く功利心の否定されきつた純粹なる宗教感情、いはゆる淸淨の願往生心が發見せらるゝ。

尊ときはみである。おそらく古今東西の宗教文獻にして、これほどに至深至純なるは類が少いのであらう。

惟ふに宗祖が、かくの如き徹底した宗教的の目ざめに參到されたのは、一つはその旺盛なる求道心（常に自己を問題とする心）、深刻なる自己省察の性格にも依らうけれども、善導大師散善義三心釋に於ける熾烈なる罪惡感がその耽讀身讀によつて、その宗教感情を一層深化したものではあるまいか。二河譬を嗜讀深讀されたことは敎

行信證に於けるその釋と愚禿鈔に於けるそれとが前後相違し、愚禿鈔に一段の深さが見らるゝよりしても明かなことである。

善導の散善義も古今獨歩の宗教文獻であらうが、この熾烈なる火が、祖師のたましひに如何に燒けついたかは想像に難くない。現にこの鈔の筆者が、聖人の持言の直後に「御述懐さふらひしことを今また案ずるに、善導の自身は現にこれ」と記せるに見ても、この筆者は意識せずに書いて居るが、彼と是と生命の脈々として相通じて居るのが見られて、これまた尊さの限りである。宗教的天才の至りつくす究竟境は「一」であることが知られて、まことに讃仰に堪えない。

善惡の否定と超越

この徹底せる罪惡觀、業感卽ち全自己と全人生との本質への目ざめは、それらの價値の全的否定なるゆゑに、吾らの道德性は全く否定せらるゝとともに、いつしか、自ら知らずしてこれを超えしめられてゐるのである。そこにあらはれて來るものは「善惡のふたつ總じてもて存知せざるなり」の立場である。

（この大問題が此鈔の眼目である。實は此鈔はこの大問題を人間に提供し、此大問題を解決せしめる爲に生れたものとさへ見らるゝ）

こゝに「善惡の二つ總じてもて存知せざるなり」といふは、人間の行動に對して道德的の價値批判、善惡の規準を認めないといふことではない。況んや善惡などはどうでもよく、問題ではないといふやうなことでは無論あるべきではない。それなれば因果撥無の外道であつて邪見である。また善惡の二つについて全く知るところも考へるところもないといふ意味でももとよりない。

それは熾なる道德意識の持主（親鸞はその代表者である）が、善をなさんとして努め努め、勵み勵んで行つた最後、遂に我善をなす能はずと自らに絶望し、自らに死せる端的の絶叫である。

人は皆中心に惡を耻ぢ怖れてゐる。しかもまた自ら定めて、これをなせばよしとする程に絶對的自由の立場は、この人生と自己との內面には成立しない。人間はこの矛盾の間に生きてゐる。さうして、ともかく善をなさうといふ要求は持つてゐる。

しからばその善をなさうといふ要求はどこから來るか。今私はこゝに道德、倫理と宗教との關係を述ぶる餘裕をもたぬのは遺憾であるが、人間の善と云はるゝものが、常に愛他心の表現、利他的行動である以上（たとへばおのれの欲せざるところ人に施すことなかれの如き）その最上の善、絶對の善は、かならず一如平等でなければならない。具體的にいへば無緣の慈悲である。これはいふまでもなく如來のもの、彼岸のものであつて、吾ら人間には有りえないものである。

吾らが何かをなさんとすれば必ず意志と意識がはたらく、それに卽して無明があり、動くとき無明に薫染せらるゝ。一日中八億四千の念、念々三途の業である。

一切凡小一切時の中に、貪愛の心つねによく善心を汗し瞋憎の心つねに法財をやく。急作急修して頭燃をはらふが如くすれども、すべて雜毒雜修の善となづく。また虛假諂僞の行となづく。眞實の行となづけざるなり。（敎行信證）

かくて「善惡ともに妄念」である。

西洋に倫理學あつて以來二千餘年、いくばくの倫理學者輩出しても、遂に善惡の規準の絕對的に成り立たぬのは、彼等が人類最高究竟の理想たる一如平等、無上涅槃の境地を知らぬからである。

人が何かをなさんとすれば、必ず理想を樹てる。その理想は常に現實を照らすものであつて、理想高ければ高きほど現實は不完全となり、理想に近づけば近づくほど理想は遠くなる。理想は無限なるが故に。

かくて善を求めたのは絕對善、一如平等に招かれたのである（卽ち照らされたのである）。それが理想として輝けば輝くほど吾らには善なるものは影を薄め、最後作善の道に絕望しつくして曾無一善！　この自覺にいたるとき、本願をたのみ念佛まうす外なき自らにかへらしめらるゝのである。否、この自覺そのものが念佛まうさんとおもひたつこゝろである。

故にはじめから善惡を無視してかゝるのではない。それは外道である。然るに今日の眞宗信徒と稱するもの、たゞ惡人正機ときいて惡を肯定し、この世の母親の甘い愛に似たるお慈悲のほとけを想念に描き（これこそ偶像である）、その力によつて、こんな惡いものをお助けと安心し喜んでゐる者が甚だ多い。かくの如きは全然佛敎の精神を無視せるものであつて、むしろ眞宗を壞し、祖師に叛き、世間に害毒を流すものである。歎きても餘りあることである。

この深く高い體驗表現に對して、最も陷り易き誤解を避けたいために特にこれを銘記することである。

この善惡を否定せしむるものも本願であり、從つてこれを超えしむるものも本願である。自らを眺めて、こゝろより惡人と感ずるとき、いつしか我執は亡ぼされて居り、我執から免れさせられてゐる。おほよそ世の中に於ける一切の「障り」の根源は我執である。これが亡ぼされたとき吾らは自然に眞實の自由を得る。これ本願に於て自由なるものである。

これを聖人は

心を弘誓の佛地に樹て、情を難思の法海に流す。（敎行信證）

といひ、

大悲の願船に乘じて光明の廣海に浮びぬれば、至德の風靜かにして衆禍の波轉ず。（敎行信證）

とも表白して居らるゝ。かくて、いつしか個人の境地から全人のそれへ轉ぜしめられてゐるから、人格は自然に統一されて（大統一のうちに容れられて）絶對謙虚でありつゝ、しかも堂々として無碍自在である。

自己及び人生を超えつゝ

この全人生及び自己の價値否定が具體化されて

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごとたわごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはします。

といふ、これまた宗教文獻として稀有なる、簡明にして多含なる表現となる。セント、ポウロのコリント前後書は人生否定と神の愛とを高調するに終始してゐるが、それ全部を締め上げてこの短かき表現に及ばない。

煩惱具足の凡夫（自己）、火宅無常の世界（人生）は、よろづのことみなもてそらごとたわごととは價値の全的否定である。

このそらごとたわごとと見る主觀はどこからどうして發きて來たものか。私はこの文字を見るたびに、『教行信證』の「虚假詔僞にして眞實の心なく、穢惡汚染にして清淨の心なし」をすぐ聯想する。おもふにこれは祖師が吉水入室以來、つねに第十八願の至心信樂欲生の三信を内面に成就せんとして努力せられ、加ふるに善導散善義の三心釋の、あらゆる求道者のたましひをも内體をも燒き盡さずんば止まざるごとき灼熱の文字をつねに咀嚼し反芻したが、遂に三信も三心も全部吾らの内面に成就する能はずといふ悲痛なる破局に陷つた。この祖師の苦闘は一切衆生を代表してのものなるが故に、一切群生海、人間性全體を擧げてそらごとたわごとまことあることなしと死刑を宣告したのである。

この宣告は本願が親鸞に於てなせるものである。本願が人生を見たのであり、本願が本願したのである。このとき本願はこの人生全體の中に入り、しかもこの人生の中から、人生全體を汝として呼ぶのである。これが念佛である。

この人生全體が人生を超える（難度海を度する）道は念佛あるのみである。念佛は彼岸より此岸を喚ぶ聲（本願招喚の勅命）であり、此岸より彼岸へゆく（往生極樂）の唯一の道である。

これを人生經驗として具體的に言へば、唯一眞實の生きてゆく道はたゞ念佛である。眞實に生くるとは永遠に生くることである。「念佛成佛自然なり、自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたがはず」

私はこの結歎の「五劫思惟の願を」より「念佛のみぞまことにておはします」までを、此鈔の棹尾とするよりも、聖人の深き體驗、淨土眞宗、すなはち一切の宗教といへる宗教にまされる眞實の宗教の眞諦、祕旨奥旨を具現せるものとして、世界宗教文獻中の壓卷とし、此鈔の筆者に限りなき感謝をさゝげるものである。

かくのごとき深き宗教的表現の生れて來る母胎は、もとより祖師の體驗であり、また無限大悲の顯現ではあらうが、これを醞釀したのは本鈔筆者の「露命わづかに枯草の身にかゝりて候ふほどにこそ、相伴はしめたまふ人々、御不審をも承はり、聖人の仰の候ひし趣をも申し聞かせまゐらせ候へども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことにて候はんづらめと歎き」、「一室の行者のなかに信心異ることなからんために泣く〳〵筆を染めてこれをしる」せし歎異のこゝろ（その奥底は大悲）より、止むに止まれずして泣く〳〵筆をとられた至誠心に對し重ねて感謝のおもひを敍ぶることである。

附記

一、文中親鸞聖人を呼ぶに祖師、宗祖、聖人、親鸞とさま〴〵になつてゐるが、それは其時々の私の感じの必然がせしめたのである。親鸞と呼ぶ方最も親しみと尊敬とを持つ場合がある。他人に對して親を「ちゝ」と呼ぶが如き。

一、紙數を限られ、省略をのみ念とした爲に敍述簡に過ぎ或は不明に陷つた場合も少くあるまいと思ふ。第十四章より四章を省略したのも遺憾であり、申譯もないことである。本來言へば本書各處にある宗教上の重大問題に付ては、それだけで一卷の書を成してもよいと思ふ程である。今は問題を提供した程度にして終るの止むを得なかつたことである。

一。本鈔は祖語の鈔錄であるから、意味の重複せるところもある。故に説明にも從つて重複あるを免れない。出來るかぎりこれを避けたけれども。

聖典講讃全集第七回配本・昭和十年六月十日印刷
昭和十年六月十八日發行・編輯者宇野圓空・發行
者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎・印
刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・・・
發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎